



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	トルコ=アルメニア戦争とトルコの対ソ関係 (1919-1920)
Author(s)	山内, 昌之; Yamauchi, Masayuki
Citation	スラヴ研究, 19, 97-138
Issue Date	1974
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5041
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112986.pdf



トルコ＝アルメニア戦争とトルコの対ソ関係 (1919—1920)

山 内 昌 之

- I. 序 論
- II. 第1次大戦後のトルコの「東方関係」
- III. トルコ民族解放運動とアルメニア
- IV. 「東方政策」形成の一側面
- V. モスクワ交渉（1920年8月）
- VI. トルコ＝アルメニア戦争の経過と政治的側面
- VII. トルコ＝アルメニア戦争とソヴェト＝ロシア
- VIII. トルコとソヴェト＝アルメニアとの対立
- IX. 結 論

「今日はな、アルメニア人は、だれだって、
アルメニア人であるってことだけで、
もう容赦はされんぞ。……」

エリア・カザン、『アメリカ アメリカ』

I. 序 論

「ムドロス休戦協定いらいアルメニア人が、アルメニア国内でも国境地域でもトルコ人の集団虐殺をかたときもやめなかったことは周知のとおりである。1920年秋にはアルメニア人の暴虐は耐えがたいほどの頂点にたった。1920年6月9日我々は東部地方に臨時動員令を発し、第15軍団司令官キャジム・カラベキル・パシャを東部戦線司令官に任命した。1920年6月アルメニア人はオルトゥのトルコ人政府機関をおそい、その地方を奪った。1920年7月7日わが外務省はアルメニアに対して最後通牒を発したが、アルメニア人は尚もその行動をやめなかった。動員から3カ月半から4カ月たったのちキョテク・バルドゥズ地方に集結していたわが兵力に対するアルメニアの攻撃によって戦争が開始された」¹⁾

ここに引用した叙述は1926年にムスタファ・ケマル (Mustafa Kemal) が行なった「六日間演説」のうち、トルコ＝アルメニア戦争の開戦理由にふれた一部である。第1次大戦中のロシア革命の結果エリヴァンに独立アルメニア共和国が成立していたが、1920年になってアンカラに樹立されたトルコ大国民議会 (TBMM) 政府はこのアルメニア共和国との戦争に入り、それを解体に追いこんだ。²⁾ 国際帝国主義・ギリシャの侵略・干渉に対抗

1) M. Kemal Atatürk. *Söylev (Nutuk)*, cilt: 2, Ank., 1966, 3'üncü Baskı, s. 359.

2) 戦後アルメニアの成立については次の画期的研究書をみよ, R. G. Hovannisian, *Armenia on the Road to Independence 1918*, Berkeley/Los Angeles, 1969; id., *The Republic of Armenia: the*

First Year 1918-1919, Berkeley et als, 1971. 次に行論の関係から、日本で余りなじみがない「アルメニア問題」の歴史的な性格に最小限ふれておきたい。オスマン帝国がアルメニア平原に進出したのち、「アルメニア」(Ermenistan)なる地域は帝国領土内のエルズルム・ヴァン・ビトリス・ハルプト・スィヴァス・ディヤルバクル6州を指した。これらが通常「トルコ・アルメニア」とよばれるものである。19世紀終わりになって、従来「忠良なるミレット」(Millet-i Sadıka)とされていたアルメニア人は、バルカン諸民族の独立などに刺激されて、帝国からの分離独立運動を推進するようになった。しかもエリヴァンを中心とするいわゆる「ロシア・アルメニア」におけるナロードニキ運動・社会民主主義運動の影響を受けたダシナクなどのツァーリ帝国からの独立運動の成長とともに両帝国内のアルメニア人の活動が密接不可分なものとなる。1899年9月ゴーゴニャン(Sarkis Googonian)によるダスンツィオバリの「トルコ・アルメニア」のロシアへの統合の企てはその一例である(Hovannisian, *Armenia on the Road.....*, chp. 1 passim; L. Nalbandian, *The Armenian Revolutionary Movement*, Berkeley/Los Angeles, 1967, pp. 155-56, 157-61)。また、ダシナクとは「ダシナクツトユン」(連盟)つまり「アルメニア革命連盟」(Hai Heghapokhakanneri Dashnaktsuthiun)の構成員を意味する。1907年に社会主義綱領を明らかにし第2インターナショナルに加入した同党はアルメニアの民族運動に主導的な役割を果たした(Nalbandian, *op. cit.*, pp. 150, 214/n. 1; R. G. Hovannisian, "Russia Armenia: A Century of Tsarist Rule," *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, N. F., Bd. 19/Hft. 1. 1971, S. 39 ff)。かくして、「トルコ・アルメニア」と「ロシア・アルメニア」の統合独立がアルメニア民族運動の究極目標とされた。1892年チフリスでひらかれたダシナク第1回党大会では「平和なムスリム・トルコ人」と「腐敗せるトルコ政府」が区別されつつも、「トルコ・アルメニア」の状態が「スパルタ支配下のヘロットに擬えられ、「反乱」・「テロリズム」による「トルコ・アルメニア」解放が決議された。ダシナクの活動で有名なのは、1896年8月24日17才の少年バブケン・スニ(Babken Suni)が指導したイスタンブールの帝国銀行占拠であるが、重要な蜂起だけでも1890年エルズルム、1895年ゼイティン、1896年ヴァン、1905年「血まみれのスルタン」暗殺計画、1909年アダナなどのケースを指摘しうる(Nalbandian, *op. cit.*, pp. 160, 171, 176-77; N. Basgün, *Türk-Ermeni İlişkileri Abdülhamid'in Cülûsundan Zamanımıza Kadar*, Ank., 1970. s. 47-58, 59-62)。

これらの独立運動に対してオスマン権力は初め、行政区域の統合・再編ならびに「移民」(muhacir)によるアルメニア人の分断と少数化をはかった。1878-1904年だけでバルカンから850,000にのぼるトルコ人・ムスリムが移された。さらにアルメニア人の武装蜂起・テロルに危機感を深めたオスマン権力がとった処置が有名なアルメニア人虐殺(katliam)なのであった。たとえばアルメニア大司教座統計では、1882年にトルコ全土で2,660,000(うち6州には1,630,000)を数えたアルメニア人は、1894-96年の大虐殺によって1912年には2,100,000に激減した。ここに有名な「統計戦争」(battle of statistics)が開始される。たとえば、6州に限っていうなら前掲の大司教座統計は次のように整理できる。

	トルコ人	クルト人	アルメニア人
エルズルム	240,000	75,000	215,000
ヴァン	47,000	72,000	185,000
ビトリス	40,000	77,000	180,000
ハルプト	102,000	95,000	168,000
ディヤルバクル	45,000	55,000	105,000
スィヴァス	192,000	50,000	165,000
全体比	25.4%	16.3%	38.9%

これに対し同時期のトルコ側の公式調査はまったく異なる統計をたす。それによれば「トルコ・アルメニア」6州にはわずか660,000のアルメニア人がいたにすぎず、ムスリム人口が圧倒的多数3,000,000を占め、17%対79%の比だったとされる(詳しくはHovannisian, *Armenia on the Road.....*, pp. 35-37)。アルメニア側統計に幾分か誇張があるにせよ、トルコ側の多数派なる主張が虐殺・移民などの権力の再編を通じた「人為的」なものであることの本質を注目せねばならない。大戦勃発後、1915年のヴァン大虐殺に象徴される「トルコ・アルメニア」のアルメニア人口50%にあたる150万以上の虐殺は戦後「トルコ・アルメニア」の人口配置を根底からぬりかえるもの

して独立戦争（İstiklâl Harbi）とよばれる民族解放運動のさなかにあったトルコが、何故アルメニアとの戦争に突入したのかという点については従来もしばしば問題となっている。まずなによりも開戦がいずれの側からなされたのかという点でも異同がある。当事者はひとまずおくとして、西欧の研究者の一部はトルコ側が先制攻撃をしかけたとするが、³⁾ ソヴェト側の初期の資料では逆の指摘がなされている。⁴⁾ また、この戦争の性格をめぐるでも様々な見解が対立するがとくに現在のトルコとソ連邦の研究者の認識には鋭い相違が見うけられる。「トルコ歴史学協会」の公式見解によれば、トルコ＝アルメニア戦争は「独立戦争」の一部として「新生トルコ軍の勝利の結実」と評価される。⁵⁾ いいかえれば、トルコの外史家バユルの指摘にみられるように、アルメニアのトルコ攻撃がギリシャの侵略と同次元で把握され、戦争がトルコの反帝国主義運動の不可分の構成要素として位置づけられる。⁶⁾ バユルのこのような認識に対しソ連邦の研究者バウロフは次の疑問をなげかける。「バユルはキャジム・カラベキルによる穏和なアルメニア住民絶滅を隠蔽するとともにこれをトルコにとり全く不可避のことだったと考えている」。⁷⁾ つまりバウロフによるとトルコ＝アルメニア戦争に際しトルコが「侵略的意図」をもっていたとされる。この視点をより明確にうちだしたのはアルメニア＝ソヴェト共和国のサルキシアンである。彼は大战期のトルコのザカフカース侵入と革命期の対アルメニア戦争との連続性を強調し、トルコ民族解放運動史に重要な画期をなす1919年のエルズルム・スィヴァス両大会ですでにアルメニアに対するトルコの「侵略的意図」が形成されたとして、次の如く結論づける。「ケマリストの運動は一方で反帝国主義・民族解放的性格をおび西欧帝国主義に敵対していたが、他方ではザカフカースにたいする侵略主義的・帝国主義的性格をおびていた」。⁸⁾

であった（N. Trümpener, *Germany and the Ottoman Empire 1914-1918*, Princeton, 1968, chp. VII; Hovannisian, *Armenia on the Road.....*, pp. 48 ff; K. Aslan, *Armenia and the Armenians*, N. Y., 1920, pp. 134-37)。尚、本論の脱稿後アルメニア人虐殺にかんする以下の資料集・研究書を入手したが、紹介は他日を期したい。*Геноцид Армян в османской империи: сборник документов и материалов*, под ред.: М. Г. Нерсисян, Ереван, 1960; Е. К. Саркисян, *Политика османского правительства в западной Армении и державы в последней четверти XIX и начале XX вв.*, Ереван, 1972; İsmâ'il Râ'î'n, *Qatl-i 'Âm-i Arminiyan dar dârân-i silâtin al-Uthmân* [オスマン朝スルタンたちの時代におけるアルメニア人虐殺], Tihîrân, 1972.

- 3) 代表例として、A. J. Toynbee, *Survey of International Affairs, 1920-1923*, London, 1925, p. 367.
- 4) И. В. Сталин, *Сочинения*, т. 4, М., 1946, стр. 413. スターリンの見解をうけて、アルメニア人歴史家ボリヤンは「アルメニア政府がオルトゥを侵略することによって開戦のための形式的理由をととのえ軍事行動を開始した」とのべている。Б. А. Борьян, *Армения, международная дипломатия и СССР*, т. 2, М./Л., 1929, стр. 121.
- 5) Türk Tarih Tetkik Cemiyeti, *Tarih*, cilt: 4 (Türkiye Cumhuriyeti), İst., 1934, s. 73. 「新生トルコ国家のこの最初の勝利は、オスマン帝国が19世紀末にモスクワ人にたいして放棄したトルコ人の原住アナトリアのうちほとんどすべての土地を母国に再統合するような大きな勝利を保証した」(*Aym yerde*, s. 74).
- 6) Y. H. Bayur, *Türkiye Devletinin Dış Siyaseti*, İst., 1942, s. 67.
- 7) J. э. Багыров, “Түркијәдә милли-азадлыг һәрәкәтына даир мәнбә вә әдәбијјатын гыса ичмалы” [トルコ民族解放運動にかんする資料・文献小考], *Түркијә тарихи мәсәләләри* [トルコ史の諸問題], Бақы, 1972, сәһ. 91.
- 8) Е. К. Саркисян, *Экспансионистская политика Османской Империи в Закавказье: накануне и в годы первой мировой войны*, Ереван, 1962, стр. 435-36, 438.

以上のようにトルコ＝アルメニア戦争をめぐる相対立するふたつの見解が存在することが判明した。トルコ側の観点にたてばそれは民族解放運動を前進させた重要な要素ということになり、ソ連邦の見解からすればそれはトルコの「封建的・宗教的グループ」が国際帝国主義の挑撥によりおこなった侵略行為だとされる。⁹⁾ 後者の場合、とくに現在のソ連邦の研究者にはケマルが「進歩的・民主的グループ」を代表するという前提がみうけられ、¹⁰⁾ 「封建的・宗教的グループ」の代表として例えばカラベキル (Kâzım Karabekir) がケマルに敵対する「著名なショーヴィニストにして反動家」という具合に対置され、トルコ＝アルメニア戦争の強力な推進者とみなされる。ア・エフ・ミレルによれば、「ソヴェト＝ロシアがポーランドとの戦争に追われ、このために赤軍部隊をポーランド戦線に転送せざるをえなかったことに乗じてキャジム・カラベキルはアルメニアを決定的に絶滅しよう」とつとめ、ソヴェト＝ロシアに《既成事実》をつきつけた」のであった。¹¹⁾

ところで、トルコの指導的支配者層のひとりであったカラベキルがかりに以上に指摘されたような侵略主義的傾向を有していたとすれば、何故カラベキルがソヴェト＝ロシアとの友好政策の積極的推進論者として登場しえたのか¹²⁾ という点についてソ連邦の研究者はまったく説明しておらず、そもそもその事実にさえ無自覚である。¹³⁾ しかし、トルコの対ソ関係と不可分にうちだされる対アルメニア政策がケマル、カラベキルによって「東方政策」(Şark Siyaseti) とよばれ、この「東方政策」を成立せしめるソヴェトも含めた対外関係が「東方関係」(Şark Münasebeti) と表現されることを考慮するなら、トルコの対ソ関係とトルコ＝アルメニア戦争のあいだに何らかの関連があったことは疑いない。本稿はトルコ革命のなかでトルコ＝アルメニア戦争がしめた位置を明らかにし、その性格をトルコの対ソ関係との関連で検討することを目的としている。

ここで本稿で使用した基本資料について紹介しておこう。問題の性質からして、未公開のトルコ政府外交文書・陸軍関係文書が最大の資料であるが、これは日本では利用できない。参謀本部戦史局アルヒーフ (Gnkur. Bşk. Harb Tarihi Dairesi Arşiv. Ankara) に

- 9) 「ケマリストはオスマン帝国の高官だった多数の札つき反動家たちが自らの陣営に加わることを認めるとともに、パントルコ主義・冒険主義・あれこれの帝国主義列強の要求への無原則的迎合など青年トルコ党の政策やイデオロギーの特性を継承したのであった。彼らはザカフカースへの侵略主義的渴望をもうけつけた」(С. И. Кузнецова, “Крах турецкой интервенции в Закавказье в 1920–1921 годах,” *Вопросы Истории*, 1951, № 9, стр. 143)。
- 10) バウロフは、10月革命が「ケマルの民主主義的資質をさらに強化させる原因となった」とまでいう(Бағыров, *Көстәрилән эсәри*, сәһ. 87–88)。
- 11) А. Ф. Миллер, “Из истории советско-турецких отношений,” *Международная Жизнь*, 1956, № 2, стр. 64; его же, *Очерки новейшей истории Турции*, М./Л., 1948, стр. 107.
- 12) さしあたり参照, 山内昌之, 「トルコ革命における『東方関係』(1919–1920)」, 『歴史学研究』1972. 6.
- 13) これは両国関係を扱った次の研究に一樣に共通している。Н. Моисеев/Ю. Розалиев, *К истории советско-турецких отношений*, М. 1958; М. А. Керимов, “Закавказские советские республики и Турция (1920–1922),” *ученые записки Инст. востоковедения*, 1958, № 19, стр. 3–21; С. И. Кузнецова, *установление советско-турецких отношений*, М., 1961; Ю. А. Багиров, *Из истории советско-турецких отношений в 1920–1922 гг.* (по материалам Азербайджанской ССР), Баку 1965.

については独立戦争の期間に限って最近公開されたようだが、¹⁴⁾ これらに依拠した本格的な研究は国際的にも出現しておらず、部分的にせよ対ソ関係—トルコ＝アルメニア戦争を扱う学問的研究はトルコでもだされていない。¹⁵⁾ これはケマルが「六日間演説」のなかで主題についてほとんど言及していないことと併わせて注目される。¹⁶⁾ そこで重要なのは、とくに「東方政策」を指導したカラベキルのメモワールであり、これには大量の文書・電報が所収されている。¹⁷⁾ また西部戦線司令官から初代駐ソ大使（1921.2-1922.11）に転出したアリ・フアト・ジェベソイ、経済相として対ソ交渉全権となるユスフ・ケマル・テングルシェンクのメモワールは1920年モスクワ交渉の経過を知るうえで貴重である。さらに資料価値は一番劣るが文相として1921年モスクワ交渉に参加したルザ・ヌルのものも参考になるだろう。¹⁸⁾ このように本稿で利用しえた基本資料はささやかなものであるが、これらの文献・資料さえソ連邦の研究者が無視している現在、¹⁹⁾ 主題の歴史的背景をあとづける当面の出発点にはなりうるものと考えられる。^{19a)} 他に、欧米諸国・ソ連邦で公刊されている傍証資料を用いたことを付記しておく。²⁰⁾

II. 第1次大戦後のトルコの「東方関係」

第1次大戦が終結したときトルコの「東方関係」をめぐる連合国とトルコのあいだに直ちに対立が発生したが、それはいわゆる「三サンジャク」（Elviye-i Selâse）とよばれる地域の帰属をめぐる問題であった。「三サンジャク」とはカルス・アルダハン・バトゥ

- 14) 1973年5月23日來札中の B. Lewis 教授よりの情報。この未公刊文書を駆使した公式戦史である『トルコ独立戦争』全6巻8分冊のうち直接関連する次の文献については参照できた。*Türk İstiklâl Harbi*, cilt: 1 (Mondros Mütarekesi ve Tatbikatı), Ank., 1962; cilt: 3 (Doğu Cephesi 1919-1921), Ank., 1965 [以下 *TİH*, I; *TİH*, III と略記]。
- 15) 判断の根拠として次を参照。A. *Bibliography of the Foreign Relations of the Republic of Turkey 1917-1967*, ed. by Orta Doğu Teknik Üniv., Ank., 1968. 例外として次の研究があるが未見。H. İ. Karal, *Turkish Relations with Soviet Russia during the National Liberation War of Turkey: 1918-1922* (Unpublished Ph. D. dissertation to Univ. of California, 1967)
- 16) *Söylev (Nutuk)*, cilt: 2, s. 340-41, 359-61.
- 17) K. Karabekir, *İstiklâl Harbimiz*, İst., 1960; aynı zat, *İstiklâl Harbimizde Enver Paşa ve İttihat Terakki erkânı*, İst., 1967 [夫々 *İH*, *İHEP* と略記]。
- 18) Ali Fuat Cebesoy, *Millî Mücadele Hâtıraları*, İst., 1953; aynı zat, *Moskova Hâtıraları (21/11/1920-2/6/1922)*, İst., 1955; Yusuf Kemal Tengirşenk, *Vatan Hizmetinde*, İst., 1967; Rıza Nur, *Hayat ve Hatıratım*, cilt: 3, İst., 1968.
- 19) そのなかでソ連邦各アルヒーフを駆使したハイフェッツのものは、トルコ側資料を用いていないという限界を別としても、他の研究者の水準をぬいている。A. H. Хейфец, *Советская Россия и сопредельные страны Востока в годы гражданской войны (1918-1920)*, М., 1964; его же, *Советская Дипломатия и народы Востока 1921-1927*, М., 1968.
- 19a) なお、ドイツのトルコ現代史研究者イエーシュケによるトルコの対ソ関係にふれた論文・資料紹介については次に詳しい。“Prof. Dr. G. Jäschke'nin başlıca eserleri,” *Belleten*, cilt: 38, sayı: 110, Ekim 1964, s. 795-97.
- 20) *Documents on British Foreign Policy 1919-1939*, First Series, v. XII. (Transcaucasia Feb. 1920-Mar. 1921), London, 1962 [*DBFP*, XII と略記]; *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States 1920*, v. III, Washington, 1936 [*FRUS 1920*, III と略記]; *Документы Внешней Политики СССР*, т. 1, М., 1959; т. 2, М., 1958; т. 3, М., 1959; т. 4, М., 1960 [以下 *ДВП*, I の如く略記]; 日本外務省外交史料館, 外務省記録 (マニエスクリプト), 1門 (政治), 2門 (条約) 関連文書。

ーム三県を指しており、1878年ベルリン会議でオスマン帝国はこれらの地域を戦争賠償としてロシアに割譲したが、1918年3月のブレスト＝リトーフスク条約によって「回復」していた。²¹⁾ 三サンジャクとトルコがよぶ地方の第1次大戦後の主要な特徴は、そこに法的に安定した権力が存在しないという点にあった。まさにこの特殊な位置をめぐってトルコとアルメニアとのあいだに対立が形成されることになる。この歴史的背景を次にみておこう。

第1次大戦末期カフカースには第9軍、カフカース・イスラム軍を主体としたオスマン軍がいたが、休戦に先だって1918年10月24日これら全部隊にブレスト＝リトーフスク国境への撤収命令がだされ、29日にも再び同様な命令がだされた。これらの命令が10月30日に調印される予定のムドロス休戦協定を意識していたことは明らかである。すでに10月27日、休戦交渉全権となる海相ヒュセイン・ラウフ (Hüseyin Rauf) は帝国議会において、英国は1878年6月4日キプロス協定によって三サンジャクがロシアにより放棄され主権不在(sahipsiz) 状態になった時同地域がトルコに返還されることを保証したとのべ、トルコの三サンジャク領有の意志を確認した。²²⁾ この事実からも、トルコがブレ

21) ここで三サンジャクをめぐる歴史的事情にふれる必要がある。1877-78年露土戦争の結果むすばれた1878年3月のサンステファノ [イェシルキヨイ] 条約、同6月のベルリン会議はオスマン帝国の戦争償金14億1000万ルーブリ (56億フラン) を3億ルーブリに減額したが、その代償として三サンジャクがロシアに割譲された。このロシアの利益に対抗して英国は5月23日トルコに最後通牒を発しキプロス占領を通告し、キプロス協定が締結された (以上についてトルコ側文献としては次をみよ、H. F. Gürsel, *Tarih Boyunca Türk-Rus İlişkileri*, İst., 1968, s. 129 vd; A. K. Meram, *Belgelerle Türk-İngiliz İlişkileri Tarihi*, İst., 1969, s. 154-60)。この結果、三サンジャク地方に人口変動が生じた。たとえば、1931年センサスによればカルスには「回教徒」91,053人、「非回教徒」7,041人。またアルダハン＝アルトヴィンでは1871年に「回教徒」207,879人、「キリスト教徒」14,982人つまりそれぞれ93%対7%の割合だったが、1877年には88.6%対11.4%に変動しロシア支配下では更に「回教徒」人口比は減少した。この三サンジャクは1918年3月3日のブレスト＝リトーフスク条約が規定した人民投票にもとづく8月15日付ハットウ＝ヒュマユン [布告] によりオスマン帝国に「復帰」した。人民投票結果は有権者総数87,048名のうち、「復帰」に賛成が85,124、反対・棄権が1,919であった (F. C. Erkin, *Les Relations turco-soviétiques et la Question des Détroits*, Ank., 1968, pp. 260 f., 300)。

一見して判明するようにオスマン当局による人為的操作が明白であり、しかも大戦中のアルメニア人虐殺の影響も考慮しなくてはならない。ここでは、ブレスト条約そのものについては詳述できない。トルコ側からブレスト条約を扱った研究としては次を参照、A. N. Kurat, "Brest-Litovsk Müzakeresi ve Barışını (20 Aralık 1917-3 Mart 1918)", *Belleten*, cilt: 31, sayı: 123, ss. 375-413. さらにここで指摘せねばならないのは、オスマン帝国がブレスト＝リトーフスク条約よりもなお略奪的なバトゥーム条約 (1918年8月15日) によって、十月革命後メンシェヴィキなど社会協調派を主体として成立しダシナク＝アルメニアも加わった地方権力「ザカフカース連邦民主共和国」(ЗФДР) からアフスハ (アハルツィフ)、アフルケレキ (アハルカラキ)、ナフチヴァンをも獲得したことである。オスマン帝国の略奪の本質についてはさしあたり次に基本資料が含まれている。*Из Истории иностранной интервенции в Армении в 1918 году: документы и материалы*, Ереван, 1970.

以上をふまえて、本論で便宜的に使用する国境概念について説明しておく。ブレスト国境＝1914年国境＋三サンジャク＝1877年国境。バトゥーム条約国境＝ブレスト条約国境＋ナフチヴァン＋アフルケレキ etc.＝1828年国境。1921年モスクワ条約国境＝ブレスト国境－バトゥーム＝1914年国境＋カルス・アルダハンの二サンジャク＝現1974年国境。

22) G. Jäschke, "Die Südwestkaukasische Regierung von Kars," *Welt des Islams*, N. S., Bd. II/Nr. 1 1952, S. 47.

ト条約国境までの撤退を既成事実化しその前提にたつて三サンジャクを最小限確保しようとしたことは疑いえないであろう。²³⁾ 実際、10月30日に調印されたムドロス休戦協定のうち第11条は次のように明記された。

「イラン北東部にあるオスマン軍兵力の大戦前国境背後への撤退について先になされた命令はただちに実施される。ザカフカースについては先にオスマン軍兵力の撤退が部分的に命令されたが、その残余の兵力は連合国によってその地〔＝三サンジャク〕の状況が検討され、必要となった場合に撤退するものとする」。²⁴⁾

交渉にあたって英国側全権となった英地中海艦隊司令官ガフ＝カルソープ（S. A. Gough-Calthorpe）はイラン同様に「すべてのザカフカース」からの即時撤退を主張したが、やがてケマルと共にアナトリアの運動を指導するラウフは平和条約締結までトルコが三サンジャクを「管理」することを強く主張し、カルソープを譲歩させた。²⁵⁾ このようにトルコの三サンジャク確保・継続占領が成功するかにみえた。ところがトルコに有利なこの条項に対して英本国から不満が生じてくる。英国議会下院では「アルメニア諸州」のトルコ軍完全撤退・連合軍占領が主張され、英国の基本政策が「西部アルメニアと東部アルメニアの統合」を目的にすることが確認された。²⁶⁾ このようにして、三サンジャクとくにカルスのアルメニア帰属を事実上意味する休戦協定の修正が英本国によりうちだされてくる。すなわち1918年11月11日英軍最高司令部はイスタンブル政府にたいして休戦協定第11条への追加事項を通知したが、そのなかで全オスマン軍の1914年国境への全面撤退を要求した。いいかえれば、三サンジャクの放棄を実質上トルコに強制した訳である。イスタンブル政府はこれに異議をとらえたが結局、23日になって受諾し三サンジャクにいた兵力である第9軍に1914年国境への撤退を命令した。²⁷⁾ だがこの命令にもかかわらず、第9軍司令官ヤクブ・シェヴキ（Yakup Şevki）はその実施を極力おくらせ、完全撤退が実現するのは翌1919年3月に入ってからであった。そのかんにヤクブは現地トルコ系住民のアルメニアに対する抵抗組織の建設を全力で援助した。^{27a)} この事情を次にみておこう。

23) 従って、トルコが、ブレスト国境すら維持しようとしなかったという次の指摘には賛成できない。

Е. Ф. Лудшувейт, *Турция в годы первой мировой войны 1914-1918 г.: военно-политический очерк*, М., 1966, стр. 264.

24) 協定全文は次に所収, Лудшувейт, *указ. соч.*, стр. 298-300; *ТІН*, I, s. 41-44.

25) 両者の応酬については、みよ, T. Büyükhoğu, "Mondros Mütareke Anlaşması," *VP inci Türk Tarih Kongresi, Ankara 20-26 Ekim 1961. Kongre'ye sunulan bildiriler*, Ank., 1967, s. 572-82; *ТІН*, I, s. 27-41. また、カルソープの譲歩の理由は、Hovannisian, *The Republic of Armenia*, pp. 56-57/n. 46; Lord Kinross, *Atatürk: the Rebirth of a Nation*, London, 1964, pp. 128 ff.

26) 英国外務次官セシル（R. Cecil）は下院で以下の答弁をおこなった。「アルメニアの世襲財産を少なくせんとするトルコの犯罪を許してはならない、という意見の強さを私はよく知っている。これは全体の原則である。（中略）トルコ政府の残滓や陰影がたとえ少しでもアルメニアに残ったとすれば、私は深く失望することになる」(Hovannisian, *Armenia on the Road...*, p. 249)。

27) *ТІН*, I, s. 157-58.

27 a) ヤクブの活動実態について詳しくは、S. Selek, *Anadolu İhtilâli*, İst., 1968, 4'üncü Baskı, s. 179-85; *ТІН*, I, s. 163-70. 彼はやがて英軍に逮捕され1920年4月マルタに追放される。釈放後、西部戦線第2軍司令官としてゼリシヤ軍と闘うことになる (*ТІН*, I, s. 171/n. 2)。

すでにロシア二月革命の直後、ロシア領だった三サンジャクの中心地カルスでトルコ系住民によってカルス・イスラム協会 (Kars İslâm Cemiyeti) が創られていたが、²⁸⁾ ムドロス休戦協定後まもなくトルコからの「再分離」に危機感をもったカルス県知事・市長など支配者層の提起に基き国民大会がひらかれた。この結果、1918年11月5日カルス・イスラム評議会 (Kars İslâm Şûrası) が成立したがこれは事実上のカルス臨時政府であった。翌12月になると州大会がひらかれ、同評議会はカルス国民イスラム評議会 (Kars Millî İslâm Şûrası) に発展解消した。そして、イブラヒム (Cihangiroğlu İbrahim) を議会議長、ファフレッティン (Fahrettin) を首相とする12名の「閣僚」からなる政府機構が形成された。三サンジャクの他地域でもほぼ類似した地方権力の発生がみられた。たとえば1919年1月7日アルダハンでも、アフスハ・アフルケレク・カウズマン・オルトゥ・アクババなどの代表が参加して大会がおこなわれ「国民評議会」(Millî Şûra) がつくられ、カルス国民イスラム評議会への結集を採択した。事態はバトゥーム・ナフチヴァンでも同様だった。^{28a)} それでは、これらの地方権力が目的としたものは何であったのか。それは1月16日にイブラヒムの署名で上述の諸地方の「全ムスリム」を代表してだされた共同声明から知ることができる。まず声明は、英国が「ひとりもアルメニア人がいない地域」をアルメニアに引き渡そうとしていると非難する。「アルメニア人は1,000以上のムスリム村落を焼き払い、およそ10万人のムスリム婦女・子供を虐殺した」。また声明は、平和条約に先だって三サンジャクにアルメニアの支配が強制されるならムスリムは最後のひとりになるまで闘いつづける、と強調し次のように結論づけた。「これらの血に飢えた野獣どもが我々のあいだで生活することを許さない、と我々は誓った。まず最初に300万人に及ぶムスリムを殺害しなければ、アルメニア人は我が国土を占領し支配することはできないであろう」。²⁹⁾

この声明から判明するようにトルコ系住民の地方権力はアルメニアによる三サンジャク統合を阻止する目的からつくられた。^{29a)} 彼らは1月17-18日にカルスで国民総会 (büyük kongre) を招集し統一への気運を盛りあげる。「バトゥームからナフチヴァンにいたる諸地方の人民代表」131名が参加した総会は、「南西カフカース臨時国民政府」(Cenub-i Garbî Kafkas Hükûmet-i Muvakkata-i Milliyesi) 樹立を宣言した。政府首班にはイブラヒムが指名され、「有権者」10,000人につき議員1名が選出された。こうして三サンジャク全体を統轄する地域権力がトルコとアルメニア共和国とのあいだに出現したのである。

28) 7,200平方マイルのカルス州における「回教徒」人口比は、1886年に53%、97年に51%。さらに1914年ロシア側統計では、59% (アルメニア人25%、その他16%) であった。vgl. Jäschke, "Beiträge zur Geschichte...", S. 23; *TİH*, III, s. 17.

28 a) K. M. Fahrettin, *Kars Tarihi*, cilt: 1, Kars, 1953, s. 556-57; vgl. G. Jäschke, "Die Regierung von Kars," *Welt des Islams*, N. S., Bd. III/Nr. 3-4, 1954, S. 281; ders., "Beiträge zur Geschichte des Kampfes der Türkei um ihre Unabhängigkeit," *Welt des Islams*, N. S., Bd. V/Nr. 1, 1957, S. 23.

29) Hovannisian, *The Republic of Armenia*, p. 206.

29 a) すでに英国は第9軍司令官シェヴキに1月25日までの完全撤退を要求し、1月12日に「アルメニア政府代表」がカルスに英軍と共におもむく旨通告していた (*TİH*, I, s. 193-64)。

次に、「75日で3回名称のかわった」この政府の性格を検討しておこう。³⁰⁾

何よりも明らかなのはカルス政府がトルコと三サンジャクの非分離＝結合を目的としたことである。「南西カフカース憲法」によれば、「版図をバトゥームからナフチヴァンまでとし、平和締結まで真にその領域を維持する義務を負う！この政府は公用語をトルコ語とし、「トルコ国民と政府にとり屈辱となるすべての原因は無条件に拒否される」とした。さらに軍事・行政制度も「トルコ国家」（Türk Devleti）のそれを採用し、トルコ国旗に三色旗をあしらったものを国旗とした。トルコからの非分離の主張は、いわゆる「トルコ・アルメニア」六州にたいする次の認識からも確認される。

「ヨーロッパ政府がトルコから六州を剥奪し、他のある政府に与える決定をなす場合、我が政府はいかなるときにも六州がトルコと分離しがたい旨決議するものである」。³¹⁾

このような性格をもつ政府にオスマン＝トルコが援助したのは当然であろう。政府は「トルコ軍がアゼルバイジャンを撤退するときトルコと連帯してつくられた」（イブラヒム）からである。すなわち、1919年1月オスマン軍がカルスを退去するにあたり、ヤクブ・シェヴキは武器・資金をカルス政府に与え、1914年国境撤退後もトルコ軍現役将校・下士官が8,000名規模の「兵力を組織化し、現地住民を適切な軍事指導をもって育成した」のであった。³²⁾ なによりも政府要員がいずれもオスマン政府と深いつながりをもつものたちであった。たとえば、首相イブラヒムは1918年に連隊長としてカルスに着任した統一進歩派の活動家であり、外相ファフレティンはオスマン統治下のカルス市長であった。以上の一連の事実から、カルス政府の意図したものがあくまでもブレスト＝リトフスク条約の「合法性」を無条件に前提としトルコの民族的権利と見なした三サンジャクのオスマン＝トルコ帰属の再確認だったことを一応結論しうる。³³⁾

これまで見てきたような性格をもつ限り、カルス政府が大戦中オスマン＝トルコの虐殺・圧迫の結果生じたアルメニア人避難民の戦前居住地への復帰を拒否したのは必然でさえあった。そればかりでなく、カルス政府はブレスト国境外のザカフカースのトルコ系ムスリム住民のアルメニアとの武装闘争を積極的に支援し、連合軍休戦監視委員会（英軍）の監督すら拒否するにいたる。³⁴⁾ このような実情は、英軍当局にカルス政府の強制的解体を決意させるのに充分であった。その立案者になったのは在カフカース英軍首席将校トムソン（W. M. Thomson）と黒海方面軍司令官ミルン（G. F. Milne）のふたりの将軍であった。彼らは4月2/3日バトゥームで会談し、カルス政府解体を決定した。ミルンはそ

30) 基本資料として、*L'Etat du Sud-Ouest du Caucase, Batum, 1919 (Kars İli ve Çevresinde Ermeni Mezâlimi 1918-1920, Ank., 1970, s. 65-73*に所収)。

31) “Verfassung der Südwestkaukasischen Regierung,” *Welt des Islams*, N. S., Bd. II/Nr. 1, 1952, S. 50-51.

32) Fahrettin, *a. g. e.*, s. 557; Jäschke, “Beiträge zur Geschichte...,” S. 24; Selek, *a. g. e.*, s. 152, 154.

33) イブラヒムはのちにのべている。「私は東部戦線でアナトリアのための監視人として尽力した」（Jäschke, “Die Südwestkaukasische...,” S. 49）。

34) 一英軍将校の報告は次のように指摘している。「カルス評議会はまったく手におえない。カルスの英軍部隊がもっと増強されなければ英国の命令に従わせることもできない」（Hovannisian, *The Republic of Armenia*, p. 212）。

の理由として本国陸軍省にたいし「カルス評議会の臆面もない反協商的態度ならびにオスマン第9軍との協力」をあげた。トムソンの命令をうけた在カルス軍政長官プリーストン^{ミタリニ・ガフナー}(G. A. Preston) 中佐は「多少死活にかかわる知らせをつたえるために」4月12日のカルス議会に出席することを知らせた。12日当日プリーストンが議会に入ってもなくグルカ兵が議会を包囲し歩哨を武装解除し、プリーストンはカルス政府解体にかんするトムソンの布告を読みあげ10人ほどの議員閣僚を逮捕、他に4人の「要注意人物」を若干の戦闘ののち逮捕し首相イブラヒム、国防相アズィズ(Aziz)らをバトゥーム・イスタンブル経由でマルタに追放した。³⁵⁾ ついでプリーストンは4月19日からアルメニア側に権力を移しはじめ、24日にはアルメニア軍が50,000人の避難民とともに到着して28日に英軍からカルス市防衛をひきついだ。かくして三サンジャクを中心カルスは実質的にアルメニア共和国に統合されたのであった。³⁶⁾ 南西カフカース政府は成立してわずか58日後にその姿を消したのである。事態はアルダハンでも同様だった。カルス占領とほぼ同時にメンシェヴィキ＝グルジアは「アスハ・アルダハン国民評議会」を攻撃し、4月下旬までに全アルダハンを占領していた。当時エルズルムに居あわせたカルス政府外相ファフレッティンはただちに「ウィルソンの諸原則に従って樹立された地方政府」の解体をイスタンブルの連合各国高等弁務官に抗議した。³⁷⁾

このように英国の積極的関与のもとにアルメニアとトルコの敵対関係が形成されていく。カルス政府解体後もトルコ系住民は1914年国境に隣接する地域に国民評議会を創ってアルメニアに対する武装抵抗を1920年夏まで持続する。³⁸⁾ しばしば「ソヴェト」になぞらえらえるこれらの「シェーラ」に対するアルメニアの攻撃・絶滅を根拠としてやがてトルコ＝アルメニア戦争が開始されることになるが、³⁹⁾ その事情はトルコの民族解放運動の展開と不可分にかかわっている。次にこの点を東アナトリアを中心にみておかねばならない。

35) Hovannisian, *The Republic of Armenia*, pp. 212-18; *TİH*, I, s. 167; Fahrettin, *a. g. e.*, s. 558.

36) Hovannisian, *The Republic of Armenia*, pp. 221-22.

37) Fahrettin, *a. g. e.*, s. 558; *TİH*, III, s. 76, 97.

38) さしあたり一例としてオルトゥの場合をあげておく。オルトゥ国民評議会はカルス政府解体後、ユスフ・ズィヤ(Tahirbeyzade Yusuf Ziya)を中心とした「オルトゥ・イスラム進歩委員会」により、1919年5月25日に樹立された。翌1920年2月21日、「最高目標綱領」(Makasid-i Âli-ye Programı)のもとにトルコからの非分離を訴えた。同5月25日ズィヤは「三サンジャク代表委員会」の名で、「母国の希望・生命である国民軍がおこなうアルメニアへのジハードに全存在を賭して参加する」と決意表明。これにこたえてトルコ軍からは1,600人の分遣隊が支援兵力として送られた。この評議会の解体に抗議してアンカラ外務省はアルメニアに最後通牒をつきつけることになる。以上は次による。*TİH*, III, s. 74-75; *İH*, s. 754; M. Goloğlu, *Millî Mücadele Tarihi: Üçüncü Meşrutiyet 1920*, Ank., 1970, s. 279. 他の国民評議会については、*TİH*, III, s. 63-64, 68-70, 71-72などを参照。

39) アルメニアの「小ソヴェト諸政府 (les petits gouvernements soviétiques) に対する一連の攻撃」にふれた1920年11月のソヴェト政府宛トルコの覚書をみよ («ECHO de l'ISLAM», No. 21, 1921, 2. 1, p. 3)。シェーラの性格について詳細は不明だが、アンカラ政府はしばしばソヴェト＝ロシアにたいしアナトリアの「農民ソヴェト」について言及している。もっとも1922年11月のコミンテルン第4回大会では、これは村落共同体に慣習的なたんなる「長老会」(ihtiyar meclisleri)でしかないとされた。また1920年9月のバクー東方諸民族大会でジノーヴィエフ(Г. Е. Зиновьев)が、ケマルの「おもちゃのソヴェト」(Râtespielzeuge)を嘲笑したのはこれらのシェーラを指すのであ

III. トルコ民族解放運動とアルメニア

トルコの敗戦後まもなく12月に、スルタン＝メフメト6世 (Mehmet VI Vahiddedin) は大戦期のアルメニア人虐殺について次のように語っている。「そのような犯罪や余と同じ祖国に住む赤子^{せきし}同士の殺戮は余の心をうちひしいだ。煽動者たちが厳しく罰せられるように余は登極して直ちに調査を命じた。が、様々の分子たちが余の命令履行を妨げた。事件は今も徹底的に調査中である。まもなくさばきがくだるだろう。そして我々にかかる醜悪な事件を決して繰り返さないであろう」。つまりスルタンによれば虐殺は一部の「トルコのある政治委員会」つまり統一進歩派－青年トルコ党だけの責任に帰せられるものなのだった。⁴⁰⁾ このような認識はスルタンだけのものでなかった。たとえば、戦後いち早くトルコ分割に抗議しイスタンブルで開かれた「国民大会」はこの問題にたいして次のような態度をとっている。青年トルコ党はたしかに「嘆かわしい強圧的手段」に訴えた。だがこれはいわば戦時につきもののことである。それどころか今日ではアルメニア人と同じく、多数のトルコ人寡婦・孤児が飢え、救いのないままに投げだされている。「彼らは暴行・虐待の犠牲者だが、その多くはアルメニア人の残忍さの所産なのである」。⁴¹⁾ 以上から目立つ特徴は、「支配民族」としてのトルコ人の「アルメニア人虐殺」の本質をアルメニア人の「ムスリム＝トルコ人虐殺」の問題にすりかえていることであり、このような発想はその後のトルコ民族解放運動に共通したものとなっていく。

はやくも1918年12月4日イスタンブルで「東部諸州国民権利擁護団」(Vilâyet-i Şarikiyye Müdâfaayı Hukuku Milliye Cemiyeti) が創立されたが、^{41a)} その目的は指導者シュレイマン・ナズィフ (Süleyman Nazif) の発言から明らかとなる。ナズィフはいう、わずか60万人にすぎないアルメニア人に東部諸州 (トルコ・アルメニア) が委ねられるなら「多数派のムスリムはもとより非アルメニア人キリスト教徒の基本的権利までがあからさまにふみにじられるであろう」と。アルメニア人虐殺問題が全く無視されていることはいうまでもない。だが、この結社の成立はケマルによってトルコの歴史的・民族的権利を防衛しようとした」とされ、民族解放運動の出発点として評価される。⁴²⁾ アルメニアの併合に反対し「夜警組織」(bekçi teşkilâtı) となるこの結社は翌1919年3月エルズルムに支部を建設するが、3月9日にだされた声明によれば「東部諸州は歴史のまったき最初からトルコ人の領土であり、その地のアルメニア人住民はいついかなるときにも15パーセ

ろう (vgl. G. Jäschke, "Der Weg zur russisch-türkischen Freundschaft," *Welt des Islams*, Bd. 16, 1934, S. 37; ders., "Neues zur russisch-türkischen Freundschaft von 1919-1939," *Welt des Islams*, N. S., Bd. VI/Nr. 3-4, 1961, S. 211/Anm. 3, 212)。従って、次にみられる「農民ソヴェト」への評価は過大にすぎるであろう。А. Д. Новичев, "Антикрестьянская политика Кемалистов в 1919-1922 годах," *Вопросы Истории*, 1951. № 9, стр. 63.

40) M. T. Gökbilgin, *Millî Mücadele Başlarken: Mondros Mütarekesinden Sivas Kongresine*, Ank., 1959, s. 15.

41) [Millî Kongre], *The Turkish Point of View*, İst., 1919, cit. in: Hovannisian, *The Republic of Armenia*, p. 421.

41 a) この結社には元ビトリズ州長官ネディム (Harputlu Nedim) ら東部アナトリア出身の官僚が関係し、政府からも50,000リラの資金が援助された (Selek, *a. g. e.*, s. 97-98)。

42) Gökbilgin, *a. g. e.*, s. 114-15; *Söylev (Nutuk)*, I, s. 3-4.

ント以上になったこともなく、この諸州にアルメニア人はすこしも権利をもっていない」のであった。⁴³⁾

また注目されるのはこの結社の運動が正規軍との協力のもとでおこなわれることである。すでに第9軍はエルズルムに撤退していたが、ヤクブ・シェヴキは連合国の要求した武装解除を拒否して連合国休戦監視委員会に抵抗し、権利擁護団エルズルム支部の名士層を援助し抵抗運動を積極的に支援した。英国の圧力によりイスタンブル政府は、第9軍を1919年4月2日解体しシェヴキを召還した。⁴³⁾ しかし第9軍所属の4個師団は第15軍団として再編成され東部アナトリアの基幹兵力として民族解放に重要な役割を果たすことになる。つまりトルコ民族解放運動を推進するひとつの要素である軍と政治的抵抗組織の結合が東部アナトリアにいち早く出現したのである。このような両者の協力は、有能きわまりない新任の第15軍団司令官の登場によってさらに促進された。キャジム・カラベキルがエルズルムに着任したのは5月3日のことである。⁴⁴⁾

ムドロス休戦後、カラベキルは就任が確実視されていた参謀総長になることに失敗し、陸相の地位を獲得しそこねたケマルと共にイスタンブルで既に連合国への抵抗を決意していた。しかも彼は「東部におけるあらゆる民族闘争がアルメニア人・ルム人とのあいだのものとなる」ことを強調し、三サンジャク奪回の方針を明らかにしていた。カラベキルはのべている、「問題の根本は祖国の独立ならびにたとえ1インチであれ我々の土地を確保することにある。私はアルメニアをいわば質にとるだろう (Ermenistanı rehin alacağım)。これは我々の希望する講和を確定するうえで要となる」と。ここでいう「質」がアルメニアの占有する三サンジャク・カルス^{ギリシャ}の奪還を意味することは次の指摘からも裏づけられる。「我々は三サンジャクを回復するであろう。また祖国に有利な講和をえるためにも全アルメニアを早い機会に占領しなくてはならない」。以上のような認識にたつてカラベキルは軍と民間抵抗組織との協力をとらえ、エルズルムに国民大会をひらき「国民の願望に沿った現実的な決議」をもたらすことを提案した。⁴⁵⁾ いわゆるエルズルム大会はこのよう

43) M. Goloğlu, *Milli Mücadele Tarihi: Erzurum Kongresi*, Ank., 1968, s. 21; Gökbilgin, *a. g. e.*, s. 74; Jäschke, "Beiträge zur Geschichte...", S. 25-26.

43 a) *TİH*, I, s. 171; Selek, *a. g. e.*, s. 184; Jäschke, "Beiträge zur Geschichte...", S. 25. シェヴキの役割について次の指摘はやや異なる評価をする。H. Ertürk, *İki Devrin Perde Arkası*, İst., 1964, s. 209.

44) カラベキルは1882年イスタンブルに生まれ、1948年に死亡した。彼の家系はセルジュク朝に遡るといわれ、父メフメト・エミン・パシャ (Mehmet Emin) はクリミア戦争のときヴァーストーポリ攻防戦に参加した高級軍人だった。カラベキルは1902年に陸軍士官学校、1905年には陸軍大学をいずれも首席で卒業した(陸大では第5席で卒業したケマルと同期)。大戦が始まったとき、彼はケマル同様に陸軍中佐にすぎなかったが、第14師団長・第6軍参謀長・第18軍団司令官としてイラク戦線、ついで第1カフカース軍団司令官としてカフカース戦線に転戦した。彼はエルズルム、カルスを攻略しその「軍功」で37歳のときパシャとなり准将に昇進した。このとき彼とアルメニアのやや「宿命」めいたつながりが始まったともいえる。「東部住民が彼を征服者として歓呼したとき、カラベキルは彼のもてるすべてをこの地方にささげることになった」(Selek, *a. g. e.*, s. 151)。以上については「Kâzım Karabekir Paşanın Hayatı,» *İH*, s. v-viii. をみよ。大戦中のカフカース戦線での活動については、次を参照。K. Karabekir, *Birinci Kafkas Kolordusu'nun 1918 Yılındaki Harekâtleri ve Gördükleri*, Erzurum, 1335 (1919) (*Kars İli...*, s. 81-95に所収)。

45) *İH*, s. 2-9, 16-17, 19, 22; vgl. Jäschke, "Beiträge zur Geschichte...", S. 25-26.

にして召集されていく。そしてこのようなカラベキルの方針を促進させる契機となったのは、1919年5月28日にだされたアルメニア共和国の『トルコ・アルメニアに関する布告』であった。この布告は三サンジャクはもとよりエルズルムを含む1914年国境内部のトルコ・アルメニア六州をトルコから剥奪し自国に統合することを意図したものである。⁴⁶⁾ このようなアルメニアの主張はパリ平和会議でアルメニア側が提起した「海から海までの」いわゆる大アルメニア構想にもとづくものであったが、⁴⁷⁾ トルコがこれに反撥したのは当然であろう。たとえば、第9軍査閲官としてアナトリアに到着したケマルが各軍団に次の命令をだしたのは実にアルメニアの布告の翌日つまり5月29日のことであった。「協商諸国は我々の国家と民族独立を絶滅することを宣告した。我々が民族闘争を組織化することを間接的に兵士たちに印象づけよ」。⁴⁸⁾

ケマルは5月19日アナトリアに上陸してすぐカラベキルに、ギリシャのイズミル占領に呼応したアルメニアの攻撃を予測して、「攻撃された場合アルメニアなどに対してゲリラ戦術で防衛し闘うべきこと」を指示していた。⁴⁹⁾ ケマルの指摘をまつまでもなく、すでに休戦協定直後から東部アナトリアの民衆は、休戦委員会将校により押収されたオスマン軍武器・軍需物資の後方輸送を阻止したり、武装化を自然発生的にすすめていた。⁵⁰⁾ これらの動向がすぐれてアルメニアの攻撃の可能性に触発されていたように、東部アナトリアの民族解放運動は英国の庇護下のアルメニアによるトルコ分割の現実化を妨げる目的から発生したと結論できる。そこで次に、ケマルの表現によれば「アルメニアの侵略の危険から生じた」エルズルム国民大会について整理しておく。

エルズルム大会は東部諸州の抵抗組織を「東部アナトリア権利擁護団」(Şarkî Anadolu Müdafaai Hukuk Cemiyeti) に統合すると共に大会決議を8月7日に採択した。⁵¹⁾ まず最初に決議は「カフカース国境から我が国境にいたるまでアルメニア人が堅持している暴虐・イスラム絶滅政策・アルメニア人が行おうとしている侵略」にふれたのち、第三項で以下の宣言を明らかにした。「^{ギリシャ}ルム主義・アルメニア主義がその目的とするあらゆる種類

46) 布告の一部を紹介しておこう。「アルメニアを全面的に再確立し、アルメニア民族に完全な自由と発展を保障するために本日よりアルメニアのすべての地域が永久に統一され独立国家が形成されたことを、人民の一致した願望と意志にもとづいてアルメニア政府は宣言する」(S. Atamian, *The Armenian Community: the Historical Development of a Social and Ideological Conflict*, N. Y., 1955, p. 214)。また、9月に入ってアルメニア政府はエルズルムを占領するために、カルスと同じパターンで「強力な軍事使節」を派遣することを英国に要望した (*DBFP*, III, No. 420, p. 548)。

47) 詳細は次の研究をみよ、J. B. Gidney, *A Mandate for Armenia*, Oberlin, 1967, chp. 5 'The Peace Conference'; Hovannisian, *The Republic of Armenia*, chp. 9 'Armenia at the Peace Conference.'

48) *TİH*, III, s. 53.

49) *TİH*, III, s. 49.

50) カラベキルによる援助については、次を参照。A. Rawlinson, *Adventures in the Near East 1918-1922*, London, 1934, rev. ed., p. 157; *İH*, s. 25-26 passim; Kinross, *op. cit.*, p. 175. 武装グループの例としては、黒海沿岸ホパーパザルリゼ地方の「ベキル少佐グループ」(5,000名)、トラブゾンの「ハイダル・エフェ・グループ」(2,500名)、ギュムシュハネの「イブラヒム中尉グループ」(1,000名)、ギレスンの「アルブアルスラン・グループ」(3,000名)などをあげる。Bak. *TİH*, III, s. 54-55.

51) 決議は次に所収。*İH*, s. 106-107; Goloğlu, *Erzurum Kongresi*, s. 109-111.

の占領・干渉に対して団結して抵抗する」。すなわち、エルズルム大会の最も重要な主張は次のように整理できる。「1. アルメニア人の侵略に抗して最後のひとりになるまで闘う。2. オスマン共同体からの非分離のためにあらゆる犠牲をもちとわない」。⁵²⁾

このような特徴は、東部だけにとどまらない全国的政治組織つまり「アナトリア・ルーメリア権利擁護団」(Anadolu ve Rumeli Müdafaa-i Hukuk Cemiyeti) がつくられるスィヴァス大会の決議でも継承されている。⁵³⁾ 9月11日に採択された決議は三サンジャクを含むムドロス休戦時点の休戦ラインをトルコの「民族的国境」として絶対に維持することを確認し、アルメニア人・ギリシャ人の領土的主張を拒否した。また決議は、「古くから同じ国土に共存してきたあらゆる非ムスリム分子の各種の特権」はもはや承認されないと強調する。以上のエルズルム、スィヴァス両決議を直接の基礎として成立するのが有名な国民誓約 (Misak-ı Millî) である。

権利擁護団系議員が多数派をしめた帝国議会は1920年1月28日トルコ側の講和条件を定式化した議会決議を成立させた。国民誓約とよばれるこの決議の原案はケマルによって起草されたといわれ、⁵⁴⁾ その後のトルコ民族解放運動の基本的立脚点となり対外政策の根拠とされた。国民誓約は帝国主義的分割の拒否、係争地域の人民投票、イスタンブル・海峡へのトルコの主権、国民経済の自主的発展などを内容としたが、とくに本稿との関係で重要な第1, 2条を紹介しておく。⁵⁵⁾

1° オスマン帝国のうち、もっぱらアラブが多数派をしめて居住している、そして1918年10月30日の休戦協定締結当時、敵軍隊の占領下にあった地域はその去就を完全に自由な人民投票によって決定するべきだが、休戦協定ラインのなかにありオスマン^{イスラーム}回教徒の多数が居住し、人種・宗教の起源をともし、かつ人種的・社会的権利をたがい共有している領土は法的に一体をなし、事実上分割しえないことを明白にする必要がある。

2° 住民がはじめて自由になったとき人民投票によって母国に帰属した三サンジャクについては、必要であれば再び人民投票に委ねることを承認する。

本稿の関心からこの国民誓約を要約するなら次の二つが重要である。まず第一に、「トルコ・アルメニア」つまり東部アナトリア六州にたいするトルコの主権は自明のこととされその地位については言及すらされていない。第二に、ブレスト＝リトーフスク条約による三サンジャクの「帰属」が正当化され、それがトルコの不可分の領土と認識されている。い

52) S. Koçaş, *Tarih Boyunca Ermeniler ve Selçuklardanberi Türk-Ermeni İlişkileri*, Ank., 1970, 3' üncü Baskı, s. 229.

53) 決議は次に所収。İH, s. 216-17; M. Goloğlu, *Millî Mücadele Tarihi: Sivas Kongresi*, Ank., 1969, s. 232-34.

54) G. J., "Mustafa Kemal und der National Pakt," *Welt des Islams*, N. S., Bd. II/Nr. 4, 1952, S. 276-77; bak. *Söylev (Nutuk)*, I, s. 261-62.

55) 国民誓約の各国語文は次に所収。İH, s. 458; «*Echo de l'Islam*», No. 20, 1921. 1. 26, p. 3; H. W. Temperley, *History of the Peace Conference of Paris*, v. VI, London, 1924, p. 606; ДВП, III, стр. 682-83/прим. 97; 鈴木正四, 『アジア民族革命の研究』, 東京, 1972, 236-37頁。ここでは鈴木氏の訳を一部修正して用いる。

いかえれば、国民誓約は国際帝国主義のトルコ分割に対置される原則となったと同時に、ロシアから大戦中オスマン帝国が獲得した三サンジャクの領有を民族解放運動のなかで再確認し正当化する根拠ともなったのである。だが、三サンジャク回復を民族解放の中心目標とする限り、そのような目標は現に三サンジャク＝カルスを占有していたアルメニアを打倒することなしには実現されえない。つまり、トルコ＝アルメニア戦争の客観的要因はトルコの民族解放運動そのものに内在していたといえる。しかも、1920年4月23日に成立した大国民議会政府もこの目標を継承した。何故なら、5月9日に国民誓約がアンカラ政府の立脚点とされ7月18日には議員全員が宣誓することにより、トルコの対外政策における非妥協的原則とされたからである。⁵⁶⁾ ところでトルコ側はカラベキルもケマルも三サンジャク回復＝アルメニア攻撃を実現する場合に、ソヴェト＝ロシアの協力・援助を与件としていた。⁵⁷⁾ だが、ソヴェトは早くも大戦末期1918年9月20日ブレスト条約失効をオスマン政府に通告し、同11月13日に全ロシア中央執行委員会は同条約を正式に廃棄していた。いかえれば三サンジャクのトルコへの割譲を全面的に否定していた。⁵⁸⁾

以上みたように、三サンジャク領有を無条件に前提とするトルコの東方政策は、アルメニアばかりでなくソヴェト＝ロシアとも原則的問題をめぐって対立する性格をおびていたといえるのである。

IV. 「東方政策」形成の一側面

1920年4月に成立したアンカラ政府の最初の外交活動はソヴェトへの覚書の送付と全権派遣決定であった。⁵⁹⁾ その際トルコが対ソ関係でしめした基本方針は次のように要約される。a) 反帝国主義闘争の承認とソヴェトとの共同行動、b) グルジアのソヴェト化承認のかわりにトルコの「帝国主義的アルメニア政府に対する軍事行動」をソヴェトが承認すべきこと、c) トルコの反帝国主義闘争への軍事・財政援助の要請、やや概括的にいえば、a) を大前提として b) c) がそのコロラリーとして導かれると考えてよい。⁶⁰⁾ そして、トルコの東方政策の骨格をなしたのは b) であった。ここではトルコ＝アルメニア戦争を理解するうえで重要でありながら従来知られていない「アルメニア作戦」の決定経緯をみておきたい。

1920年4月28日のバクーのソヴェト化とアルメニア政府の訪ソ全権派遣決定のふたつを根拠にカラベキルは5月6日対アルメニア攻撃の開始をケマルに提案した。カラベキルによれば「時機を逸し、いたずらに時間をすごすことは非常に有害でありアルメニア人を含む全カフカース諸国民がポリシェヴィキと同意に達する可能性に直面し、我々の獲得す

56) Vgl. "Der Weg zur russisch-türkischen Freundschaft im Lichte Moskaus," *Welt des Islams*, Bd. 20, 1938, S. 123; bak. *Türk İnkılâbı Tarihi Kronolojisi 1918-1923*, İst., 1939, s. 83.

57) この点について詳しくは、参照、山内昌之、「ロシア革命と西アジア」、『歴史学研究』1974年6月号、27-28頁。

58) A. Ф. Миллер, "История советско-турецких отношений," *Исторический Журнал*, 1941, № 10/11, стр. 101-102.

59) 決定の様様については、bak. Tengirşenk, *a. g. e.*, s. 145-46; Y. K. Tengirşenk, "Millî Mücadelede Ruslarla ilk Temasımız," *Yakın Tarihimiz*, cilt: 4, sayı: 43, 20/Aralık/1962, s. 97.

60) 山内前掲第一論文、24-25頁参照。

べき権利を失う」かもしれなかったからである。⁶¹⁾ だがケマルは同日ただちに異議をとらなえた。その理由としてケマルは、対アルメニア攻撃が「連合国との協定の可能性」を奪い、講和条件を悪化させる惧れがあること、ソヴェトの援助を確保せずに単独で作戦に入るの是不都合なこと、をあげた。また興味深いのは、いわゆる「アルメニア問題」に関するケマルの認識である。ケマルによれば、それは「全世界のキリスト教徒」をトルコに敵対させる最大の原因であり、「アルメニア人虐殺 (Ermeni kitali) を当然意味するこの作戦をトルコ側から」おこなうのは、好意的潮流とくに合衆国を敵にまわすことになり、英国を利する結果となる。そしてケマルは、さしあたり三サンジャク内部の「群小諸政府」(küçük hükûmetleri) つまり国民評議会権力の強化ならびに「イスラム・ポリシェヴィキ」(アゼルバイジャン) のアルメニア攻撃まで待機することを得策だとした。⁶²⁾

アンカラ政府成立に先だち3月16日つまり英軍のイスタンブル占領同日に、占領に抗議する意味をもった対アルメニア攻撃にケマルが同意し国境への部隊配置が完了していたことからすれば、ケマルの拒否回答はカラベキルにとり「おどろくべき後退」であった。⁶³⁾ この点に関するカラベキルの認識は5月9日付の長文のケマル宛電報にみられる。まずカラベキルはケマルの連合国への期待感を次のように斥ける。連合国はトルコとロシアとの接触を危惧し、「東方の奔流」(Şark akını) をおしとどめてトルコを対ソ干渉に動員することを意図としている。ソヴェトがグルジア、アルメニアを粉碎できないときには、連合国はトルコを分割し絶滅するにちがいない。「平和条約を協商政府だけと締結することによって、国民の生命や我々の将来を安んじることはできない」。⁶⁴⁾

西欧との単独講和に反対しソヴェトとの接近を強調したカラベキルはアルメニア攻撃の性格を次のように指摘する。それは憎悪や復讐でなくポリシェヴィキ的原則つまり「無辜の人類を救うこと」を目的としており虐殺を意味するものでない。しかもそれは「アルメニアの膨張・侵略の当然の結果である」。またなによりも、アルメニアの国内情勢はソヴェト化する可能性をはらんでおり、「近いうちある日、赤旗をつけた列車がサルカムシュに来る」かもしれない。そのとき、ポリシェヴィキは『貴国はあまりにもおそすぎた!』というにちがいない。そうなってはもう手おくれである。⁶⁵⁾

つづけてカラベキルはブレスト条約国境であるアルパ・チャイまでの全面占領を留保するにせよ、1年このかたイスラム諸政府つまり国民評議会支配下にある1914年国境隣接地域の限定占領の必要性を戦略面からも主張した。⁶⁶⁾

以上にみた両者の応酬を整理しておけば、ケマルもアルメニア作戦それ自体を決して拒否した訳でない点がまず重要である。ケマルはソヴェトとの事前の軍事協定を条件とした作戦実施を強調した。「ポリシェヴィキとの接触にもとづく物理的かつ現実的な共同協定を確保する以前に国境外への軍事行動を開始すべきではない」。⁶⁷⁾ これに対しカラベキル

61) M. K. 'e K. K., 1920. 5. 6, *İH*, s. 705; bak. Tamim, 1920. 5. 8, *İH*, s. 712.

62) K. K. 'e M. K., 1920. 5. 6, *İH*, s. 707-708; Cebesoy, *Millî Mücadele...*, s. 482.

63) 山内前掲第一論文, 23頁; *TİH*, III, s. 50-51; *İH*, s. 707.

64) M. K. 'e K. K., 1920. 5. 9, *İH*, s. 715.

65) *Aym yerde*, s. 716.

66) *Aym yerde*, s. 716-17.

67) K. K. 'e M. K., 1920. 5. 10, *İH*, s. 727,

ケマルに劣らずソヴェトとの共同行動を主張したが、軍事協定を必要十分条件として絶対視し待機することに反対であった。というのは、いたずらに待機すれば「地下深く形成された諸条件・可能性」に急に直面し三サンジャク全体がソヴェトに統合されるかもしれないからである。⁶⁸⁾ またふたりの見解の差異は連合軍との講和の当否にかかわるものでもあった。

ケマルはアルメニア作戦が合衆国の参戦をもたらし、黒海沿岸の重要港トラブゾンが占領される可能性を危ぶんでいた。カラベキルは連合軍にはそのような能力・余裕がないことを強調し⁶⁹⁾ 次のように語る。「もし連合軍に兵力があったなら、わが東部諸州の占領に一日たりといえども遅れはしなかったであろう。彼らの主要な期待は我々を完全に絶滅するための時間かせぎ、つまり我々を弱体化することにある」。またトラブゾン占領問題については、「アルメニアの敗北ならびに〔トルコと〕イスラム諸勢力の合体とトラブゾン占領を比較すれば一時的でしかない占領のほうがより少ない害悪である。私は問題の最も重要で切実な側面をアルメニアの敗北に見いだしている」とまで言いきる。この根拠として彼は、ギリシャのイズミル占領と同じくアルメニアはトルコが弱体とみるや攻撃してくるのが確実だからとする。⁷⁰⁾

以上のケマルとカラベキルの差異をトルコ民族解放運動の国内過程との関連で整理しておく。一般にカラベキルが民族運動の最大の根拠地を東部アナトリアに求めていたことは明らかである。彼はスィヴァス大会直後9月にさえ「全国民の利益」を防衛する同大会代表委員会から独立した「東部アナトリア諸州の権利と利益」を担う東部代表委員会の存続を主張していた。⁷¹⁾ だがケマルは少しちがっていた。ケマルの考えによれば、「祖国を東部とか西部とかに二分するのは正しくない。祖国を単一のものとして把握せねばならない」。⁷²⁾ このようなふたりの差異は明らかに民族運動の戦略的方針とかかわるものだった

68) カラベキルはソヴェト化によりトルコが「三サンジャクに永遠に別れをつける」ことを惧れたが（*İH*, s. 856, 857）、この危惧はアルメニアの国内情勢に基づくものであった。1920年5月アルメニアでは反政府運動が激化し5月8日アレクサンドローホリ（ギュムリュ）では軍事革命委員会がつくられ10日にはソヴェト権力が樹立された。カルス、サルカマシュでも11日にソヴェト権力の発生がみられた。ダシナク政府はただちにその武装行動隊モーズリスト（Маузеристы）を中核に「祖国救済委員会」を組織しテロルによってアルメニア革命を弾圧した。アルメニア共産党中央委員会アピールはいり、カルス、アレクサンドローホリは「ダシナクの死刑執行人やその手先どもの猖獗する地域—《血まみれのヴァンデー》と化した」と。См. А. М. Шамсутдинов, *Национально-освободительная борьба в Турции 1918-1923*, М., 1966, стр. 183; *Из истории гражданской войны в СССР*, т. 3 (2/1920-10/1922), М., 1961, док. 455, стр. 495.

69) この点は連合軍がトルコ分割に際し直面した最大のアホリアだった。早くも1919年11月ある英軍将校は軍事力なしの東部分割の不可能なることを説いていた。「このことはここ東部だけではなく他のすべての場所でも出くわす難問である。我々には何処であれ予備兵力がない、そして統一進歩委員会〔＝ケマルリスト〕はそのことを知っている」（*DBFP*, IV, No. 609, p. 910）。他に、Rawlinson, *op. cit.*, p. 157をもみよ。

70) K. K. 'e M. K., 1920. 5. 13, *İH*, s. 728-29; M. K. 'e K. K., 1920. 5. 15, *İH*, s. 729-30; *TİH*, III, s. 82-83.

71) Bak. Selek, *a. g. e.*, s. 152-53; *İH*, s. 114. 「東部がまさにトルコの柱石だとすれば、同じく三サンジャクは東部の盾である」（*İH*, s. 754）。

72) Cebesoy, *Millî Mücadele....*, s. 73; bak. Selek, *a. g. e.*, s. 152.

73) この点を扱ったものとして、bak. Y. H. Bayur, “Kuvay-ı Milliye Devrinde Atatürk'ün Dış Siyasa ile ilgili bazı Görüş ve Davranışları,” *Bellekten*, cilt: 20, sayı: 80, Ekim 1956, s. 667 vd.

た。⁷⁴⁾ ケマルにあっては、運動全体にたいする指導性から西部戦線での対ギリシャ戦争の重要性が強調され、アルメニアとは現実に交戦状態になかったことから対アルメニア攻撃には比較的消極的だった。ケマルが東部兵力の西部戦線移動を求めた事実は何よりもこのことを証明している。⁷⁴⁾

カラベキルは兵力移動を拒否したが、それは彼が「もっぱらアルメニアの情勢と自軍の状態にのみ目を奪われていた」⁷⁵⁾ からなのではない。彼の考えではアルメニアを攻略してのちに始めて西部への兵力移動がありえた。このためにカラベキルは5月-6月の早期実施を迫ったのである。⁷⁶⁾ ケマルとやや違うカラベキルの認識は彼の東部における指導的地位に基づいていたが、⁷⁷⁾ いっそう重要なのはアルメニア攻撃がソヴェトの利益とも整合するという確信であった。この点は以下の叙述からも明らかとなるであろう。

カラベキルは5月30日になってケマルにたいし、「サン・レモで確定された平和条件⁷⁸⁾ はヨーロッパとアメリカには何らの希望も残っておらず、わが救済は東方に求めるべきだということを示した」と指摘し赤軍2個連隊のアルメニア進入を根拠に対アルメニア攻撃の開始と赤軍との結合をふたたび提起した。⁷⁹⁾ 6月1日ケマルはカラベキルのいう「わが祖国の将来が東部国境のロシア人ならびにイスラム世界との紐帯に依存している」ことに同意しながらも赤軍兵力のポーランド戦線への移動を理由に、⁸⁰⁾ 作戦開始を拒否した。ケマルは作戦実施の必要十分条件としてソヴェトのアルメニア攻撃つまり赤軍のアルメニア西部方面からの軍事圧力をあげた。でなければ「わずか3個師団だけで短期間に我々がアルメニア兵力を壊滅することは確実ではない」。結論としてケマルはいう、「アルメニア作戦決定のために必要なアゼルバイジャンもしくはポリシェヴィキ兵力の存在を我々はいまだに確認していない」。⁸¹⁾

自軍の戦闘能力を疑われた第15軍団司令官は4日に更に強い調子で作戦実施を具申した。カラベキルは次のようにいう。講和条約によればエルズルムさえアルメニアに帰属する。それ故アルメニアは機会をのがさずトルコを攻撃するにちがいない。⁸²⁾ 戦略上からも重要なサルカムシュ・ソーアトルを今占領しなければ、それらは数カ月後トルコにとり「非常に高くつく荷物」(pek pahalya mal)となる。また彼は「アルメニアを犠牲に障壁をつくっている西欧諸国のいかなる種類の援助・希望もあてにできない。西欧の勧告や奸計に

74) たとえば、K. K. 'e M. K., 1920. 5. 15, *İH*, s. 733.

75) Bayur, "Kuvay-ı Milliye....," s. 696-97.

76) たとえば, bak. M. K. 'e K. K., 1920. 5. 15, *İH*, s. 729. しかもこの見解は西部戦線司令官アリ・ファトによっても支持された。ファトの証言をみよ, Cebesoy, *Millî Mücadele....*, s. 481-82.

77) 両者の微妙な相違については外部の観測者にも明らかだった。たとえば *«Daily Telegraph»*, 1920. 10. 1, 転引. 按: Хейфец, *Советская Россия....*, стр. 134; 大正9(1920). 10. 22 発在仏石井大使より内田外相宛, 1/6/1/4, 「各国内政関係雑纂」(七国ノ部)

78) セーヴル条約の骨格である。

79) M. K. 'e K. K., 1920. 5. 30, *İH*, s. 762-63.

80) カラベキルの赤軍兵力移動にかんする認識については, *İH*, s. 685, 788, 856.

81) K. K. 'e M. K., 1920. 6. 1, *İH*, s. 764-66; Cebesoy, *Millî Mücadele....*, s. 482-83.

82) 実際, サン・レモでは次のようにとり決められた。「『エルゼールム』ハ将来, 『アルメニア』カ自カヲ以テ之ヲ奪取シ先ツ事実完成セハ連合国外ハ之ヲ法律的ニ確認スルニ至ルコトアル」(日本外務省記録, 2/3/1/86, 「サンレモ」最高会議総括報告)。

は欺かれてはならない」とケマルを揶揄する。カラベキルは次のようにも語る。「ボリシェヴィキはいずれにせよ我々の作戦を非常に歓迎するだろう。何故なら、アルメニア作戦を始めて提案したのは彼ら」なのだから。⁸³⁾ さらに彼は、「ボリシェヴィキが我々になお多くのことを期待しているのか？我々がボリシェヴィキの援助を必要としているのか？根本的な検討に値する」とケマルに皮肉をあびせる。第15軍団つまりカラベキルの戦闘能力に対するケマルの疑惑⁸⁴⁾には憤然として次のように答えた。私は2年前わずか1-2個師団でアルメニア攻撃をおこない「アルメニアの存在をエリヴァンで絶滅できるような情況を獲得した」と。⁸⁵⁾

カラベキルのかなり執拗な要請におされてケマルは6月6日ついに作戦実施に同意した。この決定の直接原因については詳らかでないが、少なくともサン・レモ会議におけるトルコ分割の最終的確認への対抗措置だったことは疑いない。いいかえれば分割に対する抗議として三サンジャク一部の実力奪取が考えられたといえよう。6月13日カラベキルは東部戦線総司令官に発令され、作戦実施は23日とされた。しかしながらこの時突如として6月20日に作戦実施が中止された。⁸⁶⁾ その理由は皮肉にもケマルやカラベキルがともに待ちのぞんでいたモスクワとの公式連絡がつき、ソヴェト政府の覚書がもたらされたことにあった。

V. モスクワ交渉 (1920年8月)

ソヴェト＝ロシア外務人民委員チチェーリン (Г. Чичерин) が署名した1920年6月3日付覚書は黒海を哨戒する英軍の監視をくぐりぬけて同16日トラブゾンについた。⁸⁷⁾ これは4月26日付ケマルの覚書にたいする返書であるが、トルコが提起したアルメニア・グルジアに対する共同軍事行動の当否にはふれず「トルコ政府の対外政策の基本原則」を評価したに留まった。ソヴェトの解釈した「基本原則」のうちで注目すべきなのは、「トルコ・アルメニア、クルディスタン、ラズィスタン、バトゥーム州、東トラキア、トルコ人・アラブ人住民の混在地域における民族自決権の承認」という指摘である。ソヴェトが言及した地域の民族自決をアンカラ政府が承認した事実はまったくない。それどころかこれらの地域はすべて国民誓約に明記されたトルコの「民族的国境」の内部にあった。「トルコ・アルメニア」についていえば、それはトルコ国家組成の一部として自明のこととされ

83) 山内前掲第一論文24頁参照。

84) これについては文相スルによるエピソードがつかえられている。bak. Nur, *a. g. e.*, s. 683.

85) М. К. 'е К. К., 1920. 6. 4, *ІН*, s. 769-72.

86) *ТІН*, III, s. 84, 91, 92, 94; *ІН*, s. 787-88, 807-808. また次は、カラベキルの発令を6月9日としている。*Söylev (Nutuk)*, II, s. 486; *Türk İnkılabı Tarihi Kronolojisi...*, s. 80.

87) 覚書全文は以下に所収。*ДВП*, II, № 372, стр. 554-55; *ІН*, s. 784-85; *ТІН*, III, s. 291-92. 両国外交関係成立の日付とされるこの覚書の日時には重要な異説がある。マダソ連邦外交辞典は新旧両版とも6月2日説をとっている (*Дипломатический Словарь*, ч. 1, М., 1948, стр. 566; *там же*, ч. 1, М., 1960, стр. 447)。正文とおもわれる仏文を所収している以下によれば6月4日である。W., "Les relations russo-turques depuis l'avènement du bolchevisme," *Revue du Monde Musulman*, No. 52, 12/1922, p. 195. ここでは上掲の三つの典拠ならびに比較的新しいソ連邦の外交史研究にしたがって6月3日をとっておく。См. *История международных отношений и внешней политики СССР*, под ред.: А. А. Ахтамзян, т. 1, М., 1967, стр. 128.

ていた。これに加うるに東部アナトリアのクルト、ラーズ系住民の自決をチチチェーリンが要求したことは、国民誓約を根拠としていたアンカラの対外政策の否定にも等しかった。そもそも「アルメニア問題」そのものを公式に承認せず、⁸⁸⁾「トルコ・アルメニア」の存在自体を認めなかったトルコにとりチチチェーリンの覚書はおどろくべきものだった。⁸⁹⁾しかしながら、チチチェーリンの「トルコ・アルメニア」に関する認識がソヴェトの原則にかかわるものだったことを確認しなくてはならない。

ロシア十月革命の直後1917年12月29日(1918年1月11日)のレーニンとスターリンの署名になる「《トルコ・アルメニア》に関する布告」は、トルコ当局により追放・強制移住させられたアルメニア人の「トルコ・アルメニア」への自由な帰還ならびに「ソヴェト代表形式」による臨時人民権力の形成を主張していた。また布告は、「トルコ・アルメニア」の地理的境界の画定はアルメニア人民代表と「隣接する(回教徒その他の)係争地区代表」との合意によるべきだと結論づけていた。⁹⁰⁾この布告が1918年1月の第3回全ロシア・ソヴェト大会で批准されたことから、⁹¹⁾先のチチチェーリンの覚書がこの布告を根拠としていたことは疑いない。トルコ側のこの布告にたいする反応については管見の限り不明である。ただ、トルコが「ロシア・東方の全回教徒勤労者へのアピール」にみられるソヴェトの認識をソヴェト＝ロシアの公式の政策と見なしたことだけは確実である。何故なら1917年11月20日(12月3日)に発表された「アピール」はトルコ分割秘密協定の破棄・無効を宣言すると共に「トルコの分割とトルコからのアルメニアの分離」の否認を強調していたからである。⁹²⁾ケマルはこの「アピール」を1920年5月11日議会で読みあげ、議員はこれを歓呼してむかえていた。⁹³⁾もっとも「アピール」はアルメニア人の自決権も承認していたが、⁹⁴⁾トルコ側ではおそらく「アルメニアの分離」の否認にアクセントがおかれて評価されたのであろう。それだけにチチチェーリンの覚書はトルコを当惑させ、その東方政策を再検討させる契機となったといえる。換言すれば、アルメニア攻撃を延期しソヴェトの真意を打診する必要が生じたのであった。⁹⁵⁾

88) たとえば大戦中1918年3月オスマン海軍軍令部長だったラウフはザカフカース諸国代表に、「アルメニア問題」とは「ヨーロッパ諸列強がオスマン帝国を圧殺するために駆使したまさに古典的策略」だと指摘している(Hovannisian, *Armenia on the Road...*, p. 139)。

89) カラベキルはその驚きをかくそうとしない。「トルコ・アルメニアとは何を意味するのか?」そもそもトルコにはアルメニアがあり、アルメニア人の密集した場所もあった。今次大戦前にはそうであった。だが、今では東部地方にはひとりとしてアルメニア人はいない。アルメニア人たちは放火し破壊をおこなった。そして人を絞め殺し虐殺し首を切った。そうしてから、彼らは自分の顔や手に血をしみこませて逃亡し、そして移住したのであった」(*İH*, s. 785-86; 他にも, bak. *İH*, s. 40, 42, 44-45 vd)。

90) *ДВП*, I, № 43, стр. 74-75. 布告のたされる背景については、みよ、Hovannisian, *Armenia on the Road...*, pp. 98-101.

91) *ДВП*, I, № 55, стр. 93-94, стр. 74/прим.

92) *ДВП*, I, № 18, стр. 34-35; *İH*, s. 708-709.

93) その模様については、M. Goloğlu, *Milli Mücadele Tarihi: Üçüncü Meşrutiyet*, Ank., 1970, s. 251. なおアピールが読まれた日付をそれぞれ5月13日、5月9日とする次の指摘は誤りである。Кузнецова, *указ. соч.* стр. 16; Jäschke, "Der Weg zur....," S. 28/Anm. 24.

94) この箇所はアルメニア人ボリシェヴィキの勧告によって付加された。см. Борьян, *указ соч.*, стр. 260.

95) 詳しい背景については、*Atatürk'ün Söylev ve Demeçleri*, cilt: 1 (1919-1938), Ank., 1961, 2'inci Baskı, s. 94 vd.

ケマルは6月20日になって回答をおこなった。それは、チチェーリンの覚書で提案していたトルコ＝アルメニア間の「公正と民族自決権に依拠した正確な国境」確定のためのソヴェトの調停に同意していた。また「現存の諸困難の解決は外交交渉の手段によって打開する」として、三サンジャクの「若干の部分」の占領作戦の延期を通告していた。⁹⁶⁾ だがこのことは、トルコが三サンジャクへの自らの主張を撤回したことを決して意味しない。それどころか、後で確認するように、ありうべきトルコの対ソ交渉においてはブレスト条約による三サンジャク帰属の再確認が疑問の余地がない前提とされるのである。⁹⁷⁾ さしあたりここでは次の象徴的事実を紹介しておこう。

6月22日カラベキルは東部戦線兵士にたいし作戦延期にかんする布告を発した。カラベキルは延期の理由として、「チチェーリンから来た公式書翰によれば我々の希望する国境が画定され、人民の多数派がムスリムである領土はトルコに与えられる（中略）と知らせていた」ことをあげていた。だが、これは三サンジャクのトルコ帰属を自明のこととしていた兵士大衆の「士気が動揺しないように」カラベキルが創作した虚構の内容なのであった。⁹⁸⁾ 以上のトルコの立脚点を国民誓約を梃子として展開するとき、ソヴェトが一方的に理解したチチェーリンの覚書にみられるトルコの対外政策の「原則」との相違が浮き彫りにされてくる。すなわち問題の焦点はチチェーリンのいう「論争の余地がないトルコ領土のトルコ国家への包含」⁹⁹⁾ という内容をどのように理解するのかという、すぐれてトルコ革命の本質にかかわる問題に他ならなかったのである。この問題を検討するために次に、1920年8月のトルコ＝ソヴェト交渉をみなくてはならない。

すでに1920年5月5日つまりアンカラ政府が成立しておよそ1週間後、ケマルはソヴ全権使節派遣を決定していた。使節団は外相ベキル・サミ（Bekir Sami）、経済相ユスフェトへの・ケマル（Yusuf Kemal）、リゼ選出議員オスマン（Osman）から構成された。彼らは陸上ルートがアルメニアによって遮断されていたので、迂余曲折ののち7月9/10日夜半になってトラブゾンを漸く出発し、トゥアプセを12日經由して19日にモスクワに到着した。¹⁰⁰⁾ 当時、コミンテルン第2回大会が開催中でチチェーリンが多忙だったため双方の会談は7月24日になってひらかれた。

会談の席上トルコ側は軍需物資の援助を要請し、その輸送障害となっているアルメニア領内経由の連絡ルートの早期打開を主張した。このように注目すべきは、アルメニアに対する共同作戦の目的がソヴェトとの連絡ルートつまり「東方径路」（Şark Yolu）の打開という形でうちだされることである。トルコの東方政策の実際の目標はアルメニアひいては究極的にソヴェトへの三サンジャク帰属を認めず三サンジャクを占領＝領有することにあった。この目標を達成するためにトルコはソヴェトとの軍事協力に基づくアルメニア攻撃

96) “Urkunden zum Frieden von Gümrü (Alexandropol),” *Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen zu Berlin*, Bd. 37/Abt. 2, 1934, übers. und bearbeitet. von G. Jäschke, S. 135-36.

97) *ДВП*, II, стр. 556; *ТІН*, III, s. 92; см. Шамсутдинов, *указ. соч.*, стр. 180.

98) *ТІН*, III, s. 95.

99) *ДВП*, II, № 372, стр. 554.

100) *ІН*, s. 812 vs. Tengirşenk, *a. g. e.*, s. 149-50 vs. 使節には東部戦線司令部から軍事顧問として軍医部長イブラヒム・タリ（İbrahim Tali）大佐、情宣部長セイフィ（Seyfi）参謀中佐も同行した。

を考慮したのだが、ソヴェトとの外交折衝では専ら援助物資の輸送を確保する連絡ルートの打開という側面が強調された訳である。このような作戦目的の陰蔽が大戦中のアルメニア人虐殺と戦後トルコのアルメニア攻撃との性格の差異を強調し、その連続性を否定する外交上の配慮だったことは明らかである。¹⁰¹⁾

実際ソヴェトは民族解放をめざすトルコに暗い影をおとしていたオスマン帝国のアルメニア人虐殺に無関心でありえなかった。外務人民委員代理カラハン(Л. М. Карахан)がアルメニアに対する「理由なき攻撃」は欧米世論に悪影響を及ぼす恐れがあると指摘したようにソヴェト＝ロシアは共同作戦に消極的な態度をとった。つまりハリル(Halil)の言によると、「抑圧されているトルコがまたしても暴虐なのだという考えが生じることを彼らは危惧している」からである。¹⁰²⁾ この場合、バクーの東方諸民族大会さえ「純粋なパワー・ポリティクス」と断じる西欧社会主義勢力に対する判断も作用したものと考えられる。¹⁰³⁾

これまで見たロシアのアルメニアに関する認識が、対ポーランドーウランゲリ戦線の熾烈化にあたって「アルメニアへの西欧帝国主義の影響を弱めてアルメニアを中立化する」¹⁰⁴⁾ という外交判断と結びついた時ソヴェトにとりアルメニアとの妥協が必然的にもたらされる。すでにトロツキーは8月2日次のようにのべていた。「我々からたとえひとりでも兵士を必要とするようなアルメニアその他に対するいかなる処置も延期されねばならない」。¹⁰⁵⁾ このソヴェトの方針がトルコの提案した軍事協力となじまないことは明白である。加えて、8月10日に締結されたロシアーアルメニア協定の内容はトルコの利益と真向から矛盾対立するものだった。この協定は、ソヴェトの経済援助・シャフタフトゥー・ジュルファ鉄道のアアルメニアへの引き渡し・アルメニアのシャフタフトゥ占領の代償としてカラバーナフチヴァンの赤軍による占領の承認をとりきめていた。¹⁰⁶⁾

ところでこの協定はそれぞれの友邦に大きな衝撃をあたえたが、トルコにとって打撃となったのはイラン領内を経由せずに済むトルコとバクーとの唯一の仲継地点シャフタフトゥのアアルメニアによる占領をソヴェトが承認したことである。¹⁰⁷⁾ セーヴル条約調印と同

101) この点でハリルがケマルたちにあてた提案の一部は興味深い。「欧米労働者の観点にたてば、新生トルコが新しい諸原理を普及し必要なポピュラリテを保証することが必要だというのがモスクワの高官たちの忠告である。(中略)我々が農民大衆の利益以外の何者をも求めていること、協商側が我々に群がり襲いかかりギリシャ軍を使喚していること等について不満を訴えることが不可欠である。また、いかなる時も我々が然るべく好戦的で侵略的な思想をはぐくんだことがなかった旨(中略)を内容とする声明を發表するのが必要と考えられる。英国議会での[労働党の]政府質問にあたってはモスクワが仲介役を果たすと高官たちはのべた。この種の質問は労働者世論のなかで印象がよくないトルコが善良にして新しい思想によって行動していることを明らかにするであろう」(M. K. ve K. K.' e Halil, 1920. 8. 5, *IH*, s. 838)。

102) Cebesoy, *Moskova...*, s. 63; M. K.' e Halil, 1920. 6. 4, *IH*, s. 799.

103) ベルリンでジェマル(Cemal)と接触したラデック(K. Радек)の指摘をみよ,*IH*, s. 798, 852; *TIH*, III, s. 134-35; *INEP*, s. 13, 15-16.

104) Ц. П. Агаян, *Великий Октябрь и борьба трудящихся Армении за победу советской власти*, Ереван, 1962, стр. 278.

105) *The Trotsky Papers 1917-1922*, v. 2, The Hague/Paris, 1971, No. 573.

106) 内容は次から判断した。“Предварительное мирное соглашение с Арменией,” *«Правда»*, № 177, 1920. 8. 12, стр. 2.

107) カラベキルの赤軍11軍・アゼルバイジャン政府宛抗議をみよ,*INEP*, s. 18-19. 在チフリス英軍司令官は8月11日、「トルコと北西イランへの道を開くことになる」ソヴェトのナフチヴァン占領は「大英帝国に対する反逆行為」であると本国外相カーズン(G. N. Curzon)宛で断じている(*DBFP*, XII, No.599)。

じ日であった8月10日協定について、モスクワで13日に開かれた会談においてトルコ側はチチェーリンに激しく抗議した。が、チチェーリンは事態が一時的なものである旨くり返して表明したに留まった。¹⁰⁸⁾では8月10日協定に象徴されるアルメニアとの妥協をはかったソヴェトは、対トルコ交渉で「アルメニア問題」をどのように位置づけたのであろうか。

まず明白なのは、国民誓約に規定されたトルコ国境つまり三サンジャクのトルコ領有を承認する意志がソヴェトに全くなかったことである。早くも7月にチチェーリンがアルメニアにたいし「小アジアにおけるアルメニアの領土的発展のために十分な領土の獲得をアルメニア人民に保障する」と提起したように、¹⁰⁹⁾ソヴェトは「トルコ・アルメニア」についてもトルコとアルメニア共和国との領土調整－国境再編を考慮していた。その画定の基準となるのは大戦前のトルコ人とアルメニア人両住民の人口統計であった。より具体的には、トルコ人のアルメニア人虐殺・圧迫による人口変動以前に遡った状態をもとに混成委員会管理下の住民交換をおこない国境を画定しようとしたのである。この考えがいわゆる「精溜原則」(принцип ректификации)による「人種学的国境」(этнографическая граница)の創出である。¹¹⁰⁾従ってソヴェトの立場からすれば、アルメニアに対するトルコの譲歩の必要性が要求されるのは当然であった。双方の対立は8月28日夜半12時30分から未明4時にかけておこなわれたチチェーリンとベキル・サミとの会談で避けがたいものとなる。¹¹¹⁾

席上チチェーリンは国民誓約国境がロシアの原則－民族自決権と矛盾するとして次のように指摘した。「あらゆる民族の分離権を我々が承認したことから、少数民族であるアルメニア人のような人民もその住民数に応じた土地を所有することが不可欠である。それ故アルメニア人にトルコの領土の一部を与えることが是非とも必要とされる。同様な原則をカルス－アルダハンの回教徒についても我々は承認する」。以上の認識にたつてチチェーリンは「トルコ・アルメニア」のうちヴァン－ビトリス両州をアルメニア共和国に割譲するよう要求した。このチチェーリンの主張は、国民誓約第2条の否定を事実上意味したといわねばならない。この点をベキルは鋭くつき応酬した。

ベキルはトラブゾン－スィヴァス－エルズルムさえ含む国際帝国主義の「大アルメニア」構想を想起させ、トルコの立脚点である国民誓約の修正・変更あるいは他の東部国境承認が不可能だと主張する。ベキルの反論の根拠にはトルコの「アルメニア問題」に対する基本認識が介在していた。ベキルによればアルメニア人はトルコのいずれの地方でも1/3以上の多数派を形成した事実はない。「ヴァン・ビトリス両州がアルメニアに委譲され併合されることは圧倒的多数派をしめるムスリムの権利を無視し、多数派が少数派の犠牲になるが如く非論理的なものであり、かつロシアの諸原則とも抵触する」。このようなベキル

108) Cebesoy, *Moskova....*, s. 70-71; Tengirşenk, *a. g. e.*, s. 162.

109) 7月19日付アルメニア政府宛覚書, Агаян, *указ. соч.*, 276.

110) 「ベキル・サミ使節団との交渉においてソヴェト政府は回教徒住民の優勢な土地はトルコへ、他方1914年までアルメニア人が多数派だった土地をアルメニアへ移動することによる旧トルコ国境についての精溜原則を提起した」(“Годовой отчет НКВД РСФСР к VIII Съезду Советов за 1919-1920 гг.,” *ДВП*, II, Прилож. № 7, стр. 726-27; см. *ДВП*, III, стр. 674/прим. 50)。

111) 以下断らない限り、8月30日付ケマル宛ベキル報告による。Cebesoy, *Moskova....*, s. 82-87; Tengirşenk, *a. g. e.*, s. 165-70.

の見解がトルコ側の一貫した立場であったことは明瞭である。すでに1919年10月ケマルが「オスマン国境外でつくられるアルメニアを我々は心から歓迎する」とのべたように、¹¹²⁾ エリヴァンのアルメニア共和国成立によっていわゆる「アルメニア問題」が解決されたという認識にたっていたからである。¹¹³⁾

「トルコ・アルメニア」はもとより三サンジャクの一部においてもアルメニア人が多数派だった事実をたえず前提として議論するソヴェトとそのような事実そのものを否認するトルコ¹¹⁴⁾との基本的差異はあまりにも明らかである。トルコ東部国境画定をめぐる双方の対立の必然的結果としてモスクワ交渉は挫折した。交渉挫折とトルコ＝アルメニア戦争勃発の関連を現在のトルコ陸軍公式戦史たる『トルコ独立戦争』は次のように指摘している。「東部戦線の現有兵力では対アルメニア作戦を開始できず、ソヴェトの直接・間接の軍事作戦援助が必要だと確信していた」ケマルは、「ソヴェトに関係なく一刻もはやくアルメニア問題に結着をつける決定をくださった」。¹¹⁵⁾ かくて、モスクワ交渉の挫折はトルコが対アルメニア戦争を開始する契機となったのである。

VI. トルコ＝アルメニア戦争の経過と政治的側面

1920年9月5日トルコ大国民議会は対アルメニア作戦実施を正式に承認した。決定の直接かつ主要な理由がモスクワ交渉挫折にあったことは明白だが、それが直ちにトルコの対ソ関係の悪化・転換を意味しなかったことに注目せねばならない。¹¹⁶⁾ これはトルコ分割を内容とするセーヴル条約をおしつけた国際帝国主義への対抗を一方で維持せねばならないトルコにとり当然であった。¹¹⁷⁾ しかもセーヴル条約は対アルメニア作戦実施決定の今ひとつの重要な動因であった。イスタンブル政府が8月10日調印した連合諸国との講和条約は東方関係においてもトルコにとって屈辱きわまりないものであった。条約88, 89条はトルコにアルメニア独立承認を義務づけ、エルズルムのアルメニア帰属を含みとした領土画定を合衆国大統領ウィルソン(W. Wilson)の裁量・調停に委ねていた。¹¹⁸⁾ セーヴ

112) “Atatürk’ün bütün Söylev ve Demeçleri,” *Yakın Tarihimiz*, cilt: 1, sayı: 5, 29/3/1962, s. 159.

113) 西部戦線司令官アリ・ファトの次の発言をもみよ、「アルメニア国民の社会・経済・文化発展を保証できる申し分のないアルメニア (mükemmel bir Ermenistan) がカフカースでつくられた。トルコ領土の一部がこのアルメニアに併合されるのは実質的に不可能である」(K. K. ’e A. Fuat, 1919. 8. 26, *İH*, s. 145)。

114) ベキルは次のようにさえる、「トルコにはいかなる時期にもまったくアルメニア人の州は存在しなかった」(Cebesoy, *Moskova*...., s. 70-71)。

115) *TİH*, III, s. 138.

116) K. K. ’e M. K., 1920. 9. 20, *İH*, s. 886. また、ソヴェトとの友好的性格を強調する9月24日付戦線命令をみよ、*İH*, s. 887; *TİH*, III, s. 149.

117) カラベキルは8月下旬にのべている。「ポリシェヴィキが我々にアルメニア人、グルジア人をけしかけ、自らもイランを攻撃するというアンカラでおきている危惧には何ら根拠がない。またポリシェヴィキの措置を疑うならそれは我々の危険な破滅の原因ともなろう」(*TİH*, III, s. 137)。

118) アルメニア国境はウィルソンにより11月22日に画定され、24日連合最高会議に手交された。ここでは東部アナトリアのうちヴァン、ビトリスは勿論エルズルム、トラブズンまでもアルメニア領土となっていた(詳しくは、*FRUS*, 1920, III, pp. 790-95, 795-804)。英国でさえトラブズン、エルズルムへのトルコの権利を認めていたことを考えあわせるなら(*DBFP*, IV, No. 492), ウィルソンの「自決」の性格が端的にでているといわねばならない。しかもウィルソンの国境とは1916年5月サイクス＝ピコ秘密協定でロシアが取得すべきトルコ東部国境と殆んど同じなのであった(Temperley, *op. cit.*, p. 84/n. 1)。

ル条約と不可分に英仏伊三国がトルコにおける勢力圏を分割した三国協定（Accord Tripartite）の存在は、カラベキルが批判したケマルの西欧諸国への期待・幻想を完全に奪うものとなった。¹¹⁹⁾ そこで次に戦争経過についてみておこう。

1920年9月24日朝バルドゥズに本格的攻撃をかけたアルメニア軍に対してトルコ軍は、28日午前3時全戦線にわたって一斉に反撃に移り、トルコ＝アルメニア戦争が開始された。開戦と同時にアンカラ政府は声明を発し、アルメニアがエルズルムを奪う目的から攻撃を行った結果戦争が開始されたとし、戦争目的をトルコが将来予想される侵略から防衛できる「ムスリム人民の地域でありながら不当にも英国によってアルメニアに与えられた地域」の占領においた。¹²⁰⁾ ここでカルスの実力奪取を公けにしていることは明瞭である。トルコ軍は戦線を三つに分け、右翼からは第11カフカース師団、中央から第12師団、左翼から第9カフカース師団が進撃した。¹²¹⁾ トルコ軍は攻撃開始当日つまり28日夕刻にはすでにサルカムシュ西方4-5キロ地点に迫り、翌29日サルカムシュは第12師団により占領、右翼でも同日カウズマンを第1混成旅団が占領した。翌30日には第9カフカース師団がノヴォセリムついでメルデネクを占領し、初期の作戦計画をわずか3日間で完了した。¹²²⁾ 緒戦でのトルコ軍の勝利は一方的であったが、政府法相・議会副議長だったジェラーレツェティン・アリフ（Celâlettin Arif）らエルズルム選出議員・権利擁護団エルズルム支部とケマルとの対立・衝突事件のためにカラベキルは作戦の一時中絶を余儀なくされた。¹²³⁾ カラベキルによるエルズルムの事態収拾のち作戦が再開され、10月24日カルス攻撃に着手した。最大の激戦となったカルス攻防戦の結果1週間後カルスはトルコ軍のものとなった。カラベキル自身が「カルスにおける戦利品は我々が10年も独立戦争を継続できるほど大量」だとのべたように、トルコの「勝利」は圧倒的であった。カラベキルの証言によればカルス攻防戦でアルメニア側が国防相・参謀総長・要塞司令官ら将軍3名、文官閣僚1、佐官級将校18、尉官級将校75、下士官12、士官候補生4、兵士1,150の捕虜をだし死傷者1,110名にのぼったのにトルコ側はわずか死者9、負傷者47という軽微な損害にとどまった。¹²⁴⁾

「戦功」で少将に昇進したカラベキルは最後の激戦地となるギュムリュ（アレクサンドローポリ）への攻撃に11月3日着手した。彼は5日夕刻までにアルメニア軍をギュムリュ西方に駆逐した。エリヴァン占領の可能性いかにすれば全面的崩壊の危機に瀕したアルメニア政府は11月6日トルコに休戦を提案した。同日カラベキルは国民誓約国境の確保

119) 作戦決定に及ぼした国際関係での動因については、bak. Bayur, “Kuvay-ı Milliye....,” s. 679 vd.

120) “К турецко-армянской войне,” *«Правда»*, № 265, 1920. 11. 25, стр. 2; “Memorandum sur les recents evenements d’Armenie. 26 Sep. 1920,” *«ECHO de l’Islam»* No. 21, 1921. 2. 1, p. 3.

121) 4個師団を主体とするトルコ軍東部戦線兵力は1920年9月現在総員26,851であったが、そのうち3個師団（計7,952）が作戦の中核となった。これに対してアルメニア軍は13,000うちサルカムシュ方面には2,900名が配置されていた。詳しくは、*TİH*, III, s. 142-44, 299; *İH*, s. 918.

122) *TİH*, III, s. 162-69; *İH*, s. 889-89.

123) この事件の性格と背景については以前検討する機会があった。山内昌之、「トルコ革命とソヴェトロシア（1920-1921）」（1973年北大提出未公刊修士論文），6節・補註1。

124) *İH*, s. 897, 898. カラベキルの指摘には誇張が含まれているかもしれない。*TİH*, III, s. 203によれば将軍3、将校50、兵士500の捕虜、Агаян, *указ. соч.*, стр. 289-90では将軍2、将校30、兵士500の捕虜となっている。

を狙ったアルパチャイ以東へのアルメニア軍完全撤退要求を中心とする4項からなる休戦条件を提示した。翌7日アルメニア政府は条件を受諾しギュムリュをトルコ軍に明け渡した。¹²⁵⁾ ここで戦争に終止符が打たれるかの如くだったが、事態はそうならなかった。その理由をみておこう。

11月8日トルコ政府はアルメニア政府に対し講和原則を通告した。そこでは、トルコ・アルメニア間の最大争点である国境問題は「たんなる統計的問題にすぎず住民投票の問題」だとされ「ポリシェヴィキとウィルソン大統領により宣言された民族自決原則にもとづいた」人民の自由な投票による自己選択を提案していた。¹²⁶⁾ だがケマルに指導されるアンカラ政府の真の意図はそこにはなかった。このことは次に紹介する「閣僚会議の実際の目的を内容とする」8日付のカラベキル宛訓令から確認される。¹²⁷⁾ 外相代理アフメト・ムフタル (Ahmet Muhtar) が署名した極秘電報は、アルメニアの休戦受諾が破滅を一時的に阻止する方便にすぎずアルメニアはいまだにセーヴル条約が与えた夜警的任務を堅持していると強調し、次の如き注目すべき指摘をおこなう。

「かつて偉大なイスラム共同体のなかにいたアルメニアがその残虐きわまりない憲兵的任務を真の確信において放棄することは絶対ありえず、またアルメニアの運命をトルコ・イスラムの社会存在のなかに友好的に包含しようとするのは不可能である。それ故アルメニアを政治的・物理的に抹殺することこそ最も必要とされる。だが、この目標の達成は我々の軍事能力ならびに全般的政治情勢の許容いかに依存しているので、その達成にあたっては上述の諸点〔＝休戦条件〕の適用・実施が必要である」。

以上から、トルコの東方政策の究極目標がアルメニアの存在自体の否定にあったことが確認される。ただこの目標はトルコ的能力からして直ちに実現できないものだった。従って独立国家としてのアルメニアの存在を否認することによるアルメニアの保護国化政策がうちだされる。これはムフタルが、アルメニア全土を占領下におきトルコ・アゼルバイジャンを結合する全道路を「無期限かつ適当な形態で」確保するよう訓令していることから明白である。しかもムフタルがいう「一時的に同意できるブレスト＝リトーフスク条約国境」のカフカース側に対する「ムスリム少数派の権利防衛を理由とする恒常的介入」の保障は、アンカラ政府の一貫した論理だったばかりか大戦中のオスマン帝国のザカフカース侵略の根拠でもあったことに注目しなければならない。¹²⁸⁾

以上のようなトルコのアルメニア保護国化政策は11月8日付のトルコ陸軍参謀本部追加条件によって更に露骨となる。それはライフル2,000挺、重機関銃20挺、軽機関銃40挺、

125) 休戦をめぐる両国の覚書の交換については次にその資料がある。《*Echo de l'Islam*》, No. 20, 1921. 1. 20, p. 3; No. 21, 1921. 2. 1, p. 3; “Urkunden zum Frieden von Gümrü....”, s. 138-42.

休戦条件の詳細については、*TİH*, III, s. 212-13; Cebesoy, *Moskova*...., s. 94; Агаян, *указ. соч.*, стр. 290-91; Хейфец, *Советская Россия и сопредельные страны*...., стр. 143.

126) 《*Echo de l'Islam*》, No. 20, 1921. 1. 20, p. 3; *İH*, s. 900; *TİH*, III, s. 306-307.

127) K. K. 'e A. Muhtar, 1920. 11. 8, *İH*, s. 901.

128) たとえば1918年2月エルズインジャン休戦協定を侵犯しザカフカースに侵略した根拠はアルメニア人による「ムスリム住民への圧迫」の阻止であり、バクー攻撃も陸相エンヴェルによればポリシェヴィズムの蔓延と「アルメニア人の蛮行」の阻止にあるとされた (см. Лудшувейт, *указ. соч.*, стр. 168, 208)。また、Hovannisian, *Armenia on the Road*...., p. 182, もみよ。

野砲3門などの武器引き渡しを要求していたが、アルメニア軍事力の解体にもひとしいこの条件を独立アルメニアが承認できなかつたのは当然といえよう。¹²⁹⁾ アルメニア政府は11月10日追加条件受諾を拒否し戦闘が再開された。¹³⁰⁾ カラベキルは1918年にひきつづいて再度1877年国境を突破した。つまり国民誓約に規定されたブレスト＝リトーフスク条約国境をこえたのである。14日10時第9カフカース師団はケペネクレルを占領し、首都エリヴァンに迫った。15日アルメニア軍の反撃は2,000名の捕虜をだして失敗、トルコ側の苛酷な休戦条件を受諾せざるをえなかつた。17日3時トルコ軍前線に受諾声明が伝えられ、翌18日になって10日間を有効とする休戦協定（のち12月5日まで延長）が成立した。

9月28日に開始されたトルコ＝アルメニア戦争はおよそ80日間で終結した。既にみたようにトルコの「勝利」は圧倒的かつ一方的であった。あるアルメニアの将軍は敗因を次の三つに求めている。i) 脱走兵の増大による兵力の欠員、ii) 将校の規律の欠如と兵士からの信頼の不在、iii) 司令官の無能力と拙劣な作戦。ことに甚だしかつたのは兵士の抗命・脱走であり民兵諸部隊も完全に11月末には戦線を放棄し四散していた。¹³¹⁾

講和交渉は11月25日ギュムリュにおいて開始された。トルコ側首席全権はカラベキル、アルメニア側は大戦中も対トルコ交渉にあつたハティスヤン（А. Хатисян）であつた。交渉開始に際して、講和締結の前提条件として強固にセーヴル条約廃棄を主張したカラベキルにおされて、アルメニア側は27日に条約廃棄宣言を声明した。この意味は重要であろう。何故なら、ここでもトルコがアルメニアをセーヴル条約によるトルコ分割の一翼として位置づけていることが確認されるからである。¹³²⁾ 実際ダンナク自らが、この宣言により「ロイド＝ジョージやウィルソン大統領のアルメニアは空中に消え去つた」と指摘するように宣言は「海から海までの大アルメニア」構想を完全に葬り去つたといえよう。¹³³⁾

アルメニア国内の革命情勢に触発されて1920年12月2/3日零時ギュムリュで講和条約が締結されたが、この全18カ条の内容は端的にいて先にムフタルがカラベキルに訓令したトルコ側講和原則の全面的勝利であつた。¹³⁴⁾ まず条約は「セーヴル条約を存在しなかつたもの（keenlemyekün）」とみなし、「トルコとの歴史的・民族的・法的結合を否定するのが不可能な」領土がトルコに帰属した。つまり、三サンジャクのうちアルメニア

129) *TİH*, III, s. 215; Агаян, *указ. соч.*, стр. 291. なお、カルス州のアルメニア軍兵力は機関銃70挺、野砲18門を所有した（*TİH*, III, s. 144）。

130) このパターンも大戦時と全く同じであつた。1918年5月15日ギュムリュ以東25キロへの撤退を要求したオスマン軍は翌16日に新提案をだし、その回答をまたずにブレスト＝リトーフスク国境を侵犯した（Hovannisian, *Armenia on the Road....*, p. 175-76）。

131) Агаян, *указ. соч.*, стр. 209, 307-308. 司令官の腐敗を物語るエピソードとして、トルコ軍がカルス攻撃に入ったとき要塞司令官が就寝しており副官も彼をおこさなかつた事実をみよ、Kinross, *op. cit.*, p. 243.

132) 11月1日付休戦提案にみられる、「ロンドンの金融資本家の多大の利益」のために活動するアルメニアと「西欧帝国主義者の強奪に対し東方を殆んどひとりで防衛」しているトルコとの対比をも参照（*«Echo de l'Islam»*, No. 19, 1921. 1. 1, p. 3）。

133) Atamian, *op. cit.*, p. 243.

134) 条約全文は次に所収されている。*İH*, s. 1192-93; *TİH*, III, s. 308-11; G. Jäschke, "Der türkisch-armenische Friedenvertrag von Gümrü (Alexandropol)," *Welt des Islams*, N. S., Bd. II/Nr. 1, 1952, S. 26-30.

が占有したカルスを獲得した訳である。さらにナフチヴァン・シャフタフトゥについてもトルコの保護権が承認された。いいかえればトルコはアルメニアに対する限りブレスト条約国境のみならず、バトゥーム条約国境さえ確保したのである。またこの条約はアルメニアの軍事力を制限・縮小した。アルメニアの軍備は「国内の安全を防衛するに足る」野砲山砲8門、機関銃20挺、兵力1,500名に制限され、15センチ曲射砲・長距離砲など重火器所有の禁止、徴兵制廃止が義務づけられていた。これはアルメニア軍の規模がトルコ軍1個師団程度に縮小されたことを意味している。さらにトルコは「アルメニア領内の自由通過権」、規定量以外の武器輸入禁止を名目とした鉄道管理権を獲得した。¹³⁵⁾ トルコによる保護国化は次にあげる第13条において完成される。

「トルコ大国民議会政府は本条約がエリヴァン共和国に保証した権利を侵犯しないという条件つきで、国家独立・領土不可侵を脅かすような侵略に対抗してアルメニア国内において一時的に軍事防衛措置をとることができる」。

以上の実態からしてギュムリュ条約は、トルコの東方政策の目標をほぼ実現したものと結論しうる。アルメニアは11,491平方マイル相当の領土を喪失し、その版図は26,491平方マイルから15,000平方マイルに削減された。バトゥーム条約では13,050平方マイル相当の領土を割譲したのだから、¹³⁶⁾ アルメニアからすればギュムリュ条約はバトゥーム条約の再版に等しかったといえる。しかも条約規定の徹底性という点ではむしろギュムリュ条約の方が一層甚だしかった。¹³⁷⁾ あるアルメニア人ボリシェヴィキが、条約は「戦勝国たる一方が自らの条件を無理矢理おしつけ、アルメニアの独立はたんなるかげになっている」と呼んだのは当をえている。その限りでアルメニアにとっては「帝国主義的トルコに対して農奴的に従属する条約」であったと見なせる。¹³⁸⁾ にも拘らずダシナク政府がこの条約を締結したのは如何なる意図からであったのか？その理由は次節で明らかとなるが、さしあたりここではソヴェト化と赤軍の脅威に触発されてトルコ側戦線の安全を確保しようとしたこと、トルコ軍と赤軍とを衝突させる期待にあったことを指摘するに留めておく。¹³⁹⁾

条約調印がアンカラで歓迎されたことはいうまでもない。条約内容は12月4日アフメト・ムフタルにより議会で報告され、議員たちの「激しい拍手」をうけた。¹⁴⁰⁾ アンカラ

135) 大戦期1918年6月カラベキルはバトゥーム条約とは別個に、同趣旨の協定をアルメニアに強制していた。см. Лудшувейт, указ. соч., стр. 191-92; *Из Истории иностранной интервенции в Армении.....*, док. 84, стр. 180-81.

136) Atamian, *op. cit.*, p. 243; Hovannisian, *Armenia on the Road.....*, p. 199.

137) 両条約のなかには完全に合致する表現さえある。ほぼ対応する条項は次の通りである（〔 〕内はギュムリュ条約）。M: 1 [M: 1], M: 2 [M: 2], M: 4 [M: 5], M: 6 [M: 11], M: 7 [M: 15, 16], M: 8 [M: 12], M: 9 [M: 16].

138) А. З. Бегиян, *Образование и упрочение суверенного советского Армянского государства*, Ереван, 1962, стр. 179, 180.

139) А. Гуковский, "Победа советской власти в Армении в 1920 году," *Историк Марксист*, 1940, № 11, стр. 15.

140) 条約への不満はある議員による「オスマン帝国のかつての臣民である反逆者たちに関する規定が何故作製されなかったのか？」という質問くらいであった。ムフタルが答弁したように、「個人たちに考えをうばわれることと提起された問題の大きさは比較にならない」ほど条約の意義はトルコにとって明白だったのであろう (vgl. Jäschke, "Der türkisch-armenische Friedenvertrag....," S. 37, 40).

政府指導部の「勝利」に対する興奮は参謀総長イスメト（İsmet）のカラベキルにあてた祝電に象徴されているのでその一部を紹介しておこう。

「東部作戦は我々の主張を勇気づけた。東部の勝利までは我々はうちひしがれ畏縮していた。情勢に一息いれる吐け口が是非とも必要であった。アルラーの御加護により君は完べきな勝利と処置によってこれを切りひらいた。我が国民、我が歴史へのかくも偉大な献身は君に運命づけられていたものであり、君に約束されていたのだ。アルラーは君を我が国民にくだしおかれた。ことにムスタファ・ケマルはその感謝の念をどのように表現し説明してよいのか知らなかった。みながそうである。東方は微妙な局面に入った。救済への道が現実的に切りひらかれたのである」¹⁴¹⁾

イスメトがいうように、対アルメニア戦争はトルコにとり「救済への道」を開くものだったに違いない。だが同時にそれは東方径路の打開によるソヴェトとの国境の接壤ならびに全面接触をもたらした。何故ならば、ギュムリュ条約締結とほぼ同時刻12月2/3日零時エリヴァンでソヴェト権力が樹立されていたからである。しかもソヴェト＝ロシアがギュムリュ条約の不法性を非難し、「アルメニア問題」に直接介入してくるのはまさにその直後のことであった。

VII. トルコ＝アルメニア戦争とソヴェト＝ロシア

トルコ＝アルメニア戦争が発生した時、連合国やアルメニアはトルコのアルメニア攻撃がソヴェトとの協定すくなくともその了解に基づくものと推測していた。アルメニア政府が10月3日トルコの攻撃を中止させる措置をとるよう、ソヴェトに要求したのは上述の推測からすれば当然であった。¹⁴²⁾ ソヴェトとトルコのあいだに成文化された軍事協定が存在しなかったのは確実だが、ナフチヴァンで局地的に実現していた赤軍とトルコ軍の軍事協力¹⁴³⁾ はトルコ＝ソヴェト両国の「密約」を想像させる根拠となった。連合国側はこの点をつき「密約」の存在を意図的に宣伝しつづけた。¹⁴⁴⁾

これに対してソヴェト側は10月27日チチェーリンの声明で「トルコの攻撃とソヴェト政府の政策とはいかなる関係もない」と指摘したように、連合国がいうトルコとの了解を全面的に否認した。チチェーリンは10月5日に在アルメニア全権代表レグラン（B. B. Лeгpан）にあて「アルメニアは最近まったく完全に協商側の攻撃的政策の手足となったが、それが粉砕されるのを看過できない」とのべていた。¹⁴⁵⁾ これは戦争とその拡大が国

141) K. K. 'e İsmet, 1920. 11. 28, *İH*, s. 903; Cebesoy, *Milli Mücadele...*, s. 485. また, Kinross, *op. cit.*, s. 244 には参謀本部の興奮がいっそう劇的に紹介されている。

142) *TİH*, III, s. 176-77. また次にあげる日本の一外交官の報告をみよ。「土国国民党軍ノ『アルメニア』侵入ハ『ソビエツト』政府トノ何等協定ニ依ルモノノ如ク同政府ハ土国『ナショナルリスト』ノ『コース』『アルダハン』及ビ『バトゥーム』占領ニ対シ援助スベキ旨ヲ約セン由」(大正9(1920). 10. 22 発在伝・石井大使より内田外相宛, 1/6/1/4, 「各国内政関係雑纂(土国ノ部)」)。

143) これについては, III-註57 にあげた拙稿をみよ。

144) *DBFP*, XII, Nos. 605, 607, 637/n. 2. また, イスタンブルの英仏軍司令部が公表した土ソ間の「密約」の具体的内容については次を参照。大正9(1920). 12. 8 発在イスタンブル・高橋少佐より参謀総長宛, 1/6/3/24-9, 「露国革命一件・労農政府ト各国トノ関係二」; 同上, 2/3/1/84, 「巴里平和会議・近東問題一」。

145) Кузнецова, указ. статья, стр. 145; Агаян, указ. соч., стр. 288.

際帝国主義のザカフカース介入をもたらし反革命が蘇生・活発化することの危惧からもたらされた認識である。従って、「協商政府を挑撓する可能性がある軍事行動を我々は不適当と考える。ザカフカースにおける重大な危機を許すことなく和平政策を系統だって追求する」のが戦争初期にソヴェトがとった基本方針であった。¹⁴⁶⁾

たしかにダシナク政府は戦争勃発直後、英国に介入を要請し「カフカースに対する作戦基地」たるトラブゾン^{インフラクタイカブル}を連合軍・ギリシャ軍が占領するよう訴えていた。介入問題についていえば英国は終始消極的であり、それは連合軍軍事会議の基本方針ともなった。結局、英国がアルメニアに与えた援助は黒海哨戒の強化・少量の軍需物資供与にすぎなかった。また10月26日のアルメニア政府による英国への調停依頼も、アンカラとの公式接触がないという理由で拒否されている。このように英国をはじめとする国際帝国主義はザカフカースへの軍事干渉再開に極めて否定的であった。¹⁴⁷⁾ この理由の一端が少なくとも、戦争発展の結果たやすく生じたトルコとソヴェトの軍事衝突への期待にあったことだけは明らかである。¹⁴⁸⁾ ソヴェトについていうなら、このような英国の意図にかなり早くから危機感をもってしたが、¹⁴⁹⁾ それは戦争拡大とともにますます増大した。ソヴェトの危機感とはトルコのバトゥーム占領の可能性に関連してもたらされた。実際にはトルコはこの段階ではグルジアの中立をとりつけており、バトゥーム占領は考慮さえされていなかった。¹⁵⁰⁾ だが英国海軍省と陸軍省が11月8日、トルコがバトゥームを占領する場合、さしあたり英海軍が艦砲射撃によってグルジアを掩護することを相互に了解しあっていたことから、¹⁵¹⁾ ソヴェトのトルコ＝アルメニア戦争への対応がまず英国に対する抗議として現れることになる。チチェーリンは11月16日メンシェヴィキ＝グルジアに対して、ロシアとアゼルバイジャンの安全を脅かす英軍のバトゥーム再占領の動向に抗議し、「両方のソヴェト共和国の安全防衛のためにまさに重大な処置をとる」可能性を示唆し、同趣旨で英国に抗議した。¹⁵²⁾ 以上のように国際帝国主義の介入の可能性を危機意識としつつソヴェトは、トルコ＝アルメニア戦争の調停を試みることになる。だが、それは次にみるようにアルメニアのソヴェト化を決意する過程と本質的にまったく同じ経過をたどるのであろう。

146) 10月6日付チチェーリンより在バクー・オルジョニキッゼ宛, Хейфец, *Советская Россия*...., стр. 133; Кузнецова, *указ. соч.*, стр. 24.

147) Cf. *DBFP*, XII, Nos. 602, 610, 611, 612, 623, 631, 632. カーズンによれば「連合国のトラブゾン占領は実行不可能で、ギリシャの占領はのぞましくない」(10月4日)のであった(*DBFP*, XII, No. 604)。

148) 次のような『ディリー・ヘラルド』(11月13日)の論調はその気分をよく伝えている。「アルメニアを代償としてケマルに与えケマルを承認することが必要である。そしてケマルはバクーから赤どもを駆逐することに同意するだろう(中略)。回教徒に対する呼びかけと密約によってソヴェト＝アゼルバイジャンを打倒できる」(*«Правда»*, № 267, 1920. 11. 27, стр. 2)。

149) すでに9月18日ザカフカースのソヴェト当局は、英国がトルコを反ソ戦線に動員する可能性をモスクワに知らせていた。см. Дж. Б. Гулиев, *Борьба коммунистической Партии за осуществление ленинской национальной политики в Азербайджане*, Баку, 1972, стр. 562.

150) *TiH*, III, s. 178-80.

151) *DBFP*, XII, Nos. 615, 617.

152) *ДВП*, III, № 180, стр. 330; см. “Россия и Грузия,” *«Правда»*, № 287, 1920. 12. 21, стр. 1. また、英ソの応酬については次をみよ, *ДВП*, III, № 191, стр. 344-45; *DBFP*, XII, Nos. 624, 626.

ソヴェトが戦争に介入する直接の契機は、トルコ軍のカルス攻撃が現実化した時点に求められる。これは明白にトルコの三サンジャクひいてはザカフカースに対する「侵略的－民族主義的渴望」（レグラン）つまり領土併合意図を危機感としていた。¹⁵³⁾ チチエーリンは10月11日カルス攻撃の中止をトルコに要求したが、ケマルは16、22両日に亘ってこれを拒否した。¹⁵⁴⁾ すでに10月初旬ソヴェトの駐アルメニア全権代表レグランはアルメニアに対してソヴェトが軍事援助を行なう用意がある旨通知し8月10日協定に基づく調停案を作っていたが、そこではトルコがブレスト、バトゥーム両条約の規定による権利を放棄するものとされた。アルメニアとソヴェトとの交渉は13日になってエリヴァンで開始された。¹⁵⁵⁾ ソヴェト側はアルメニアに次の条件に同意するよう求めた。i) トルコにいく「ロシア軍部隊」のアルメニア領内通過の承認、ii) 連合国との外交関係の断絶、iii) セーヴル条約廃棄宣言。¹⁵⁶⁾ i) の要求はトルコとソヴェトの連絡ルートの保障を意味するものとおもわれるが、アルメニア政府はこれらの条件を連合国の援助を期待して拒否した。¹⁵⁷⁾

しかしながら、この時点でソヴェト側はすでにアルメニアのソヴェト化を原則として決定していた。つまり、オルジョニキдзе（Г. К. Орджоникидзе）はバクーから12日、ダシナク政府が「倒壊のやむなきにいたる公算」を指摘しソヴェト権力樹立への「政治的援助の供与」を提案し、10月12/13日深夜のロシア共産党政治局により承認されていたからである。¹⁵⁸⁾ ところがダシナク政府は先に一旦拒否したソヴェト側の調停を10月下旬になってから受諾した。この理由として、カルス陥落の危惧とトルコ軍によるアルメニア全領土占領の可能性をあげることができる。カルス放撃が始まった10月28日、両国代表は「ロシア共和国ならびにアルメニア和平代表団最終決定議定書」（Протокол заключительного постановления мирных делегации РСФСР и Армении）を締結した。この議定書の最も重要な骨子は次の点にあった。「ロシア共和国は西部アルメニア諸州のアルメニアへの統合を正当なものと見なし、当該諸州あるいはその一部のアルメニアへの現実的統合を目的とした影響を友邦にはたらきかける用意がある」。この西部アルメニアという表現が三サンジャクのカルスはもとより「トルコ・アルメニア」をも意味したことは議定書付属の講和条件原案からも知られる。¹⁵⁹⁾ このような条件をトルコが拒否したのはいうまでもない。さらに、カルスがトルコ軍の手で占領された翌日つまり10月31日ダシナク政府が「現実的援助」を要請したのに応じ、ソヴェトは11月に入って党カフカース・ビュロー員ムヂヴァニ（Б. Мдивани）を調停全権として前線に派遣した。だが、カルス

153) См. Саркисян, *указ. соч.*, стр. 439.

154) Себецов, *Moskova....*, s. 88, 90; Агаян, *указ. соч.*, стр. 289.

155) Кузнецова, *указ. статья*, стр. 144-45; Агаян, *указ. соч.*, стр. 292; см. Саркисян, *указ. соч.*, стр. 444.

156) W., "Les relations russo-turques....," p. 198.

157) Cf. *DBFP*, XII, No. 606. 「我が政府は連合国からの即時援助をあてこんで、ポリシェヴィキ（との結合）を遅らせていた」（*DBFP*, XII, No. 613）。

158) См. В. И. Ленин, *Полное собрание сочинений*, т. 41, стр. 672.

159) Кузнецова, *указ. статья*, стр. 144-45; Агаян, *указ. соч.*, стр. 292; Хейфец, *Советская Россия....*, стр. 141-42.

を占領したトルコは既成事実のうえに立って11月14日調停を拒否する。24日ギュムリュに到着したムチヴァニにカラベキルはアルメニアが「我々の全条件をうけいれた」と回答し、ムチヴァニのギュムリュ交渉列席さえも拒絶するにいたった。¹⁶⁰⁾ ソヴェトは11月13日アルメニアへの赤軍導入を提案していたが、ソヴェト化の危険と英国の圧力におされたダシナク政府の拒否にあった。¹⁶¹⁾ ソヴェトは従来の調停方針が完全に失敗したことを自覚せざるをえなかったであろう。¹⁶²⁾

すでに11月8日バクーでスターリン列席のもとにロシア共産党カフカース・ビュロー、アゼルバイジャン共産党中央委員会、同バクー委員会、アルメニア共産党中央委員会の合同会議がひらかれ、「アルメニアを崩壊から救うためにいっそう効果的な措置をとる必要性」を決議していた。これをうけて27日ロシア共産党政治局はついに「ソヴェト権力の勝利のみがトルコのアルメニア占領を抑止できる」と結論づけた。¹⁶³⁾ 29日エリヴァンのレグランはアゼルバイジャンでつくられたアルメニア・ソヴェト社会主義共和国革命軍事委員会に全権力を移すようダシナク政府に最後通牒を発した。同時に赤軍11軍はアルメニア国境をこえ、ディリジャンにソヴェト権力を樹立した。¹⁶⁴⁾ 以上のようにアルメニアのソヴェト化はすぐれてトルコの「ザカフカース中心部」への侵入の脅威から生じることになる。ケマルやカラベキルがあればほど期待しソヴェトに要請した赤軍のアルメニア攻撃は、皮肉なことに当のトルコへの対抗措置として行なわれたのである。

ギュムリュ条約締結とほぼ同時刻、12月2/3日零時エリヴァンで「ダシナク左派」のドロ（Дро-Канаян）とレグランのあいだに8項からなる協定が結ばれ、先頃までは「連合国の手先」（スターリン）とされていたダシナクとコムニストとのあいだに連立政府が成立した。協定はソヴェト＝ロシアに「アルメニアの独立を防衛するために必要な軍事力の即時集結」を義務づけるとともに「ロシア共和国がアルメニアに対して以前の国境を回復する義務」を負わせた。いいかえればカルス州のアルメニアからの非分離ならびにギュムリュ条約の否認を公的に定式化したのである。¹⁶⁵⁾ エリヴァンの新権力はダシナクの「すべての隷属的協定」とともにギュムリュ条約の廃棄を宣言したが、それはギュムリュ条約が「ダシナクの破滅的無能力さを新たに証明」した「ダシナクの民族主義の断末魔の苦悶」だからなのであった。¹⁶⁶⁾ このソヴェトの認識と「国民政府が結んだ最初の条約」（ケマル）として全面的に条約を評価するトルコとのへだたりは余りにも大きいといわねばならな

160) *ДВП*, III, № 173, стр. 325; Хейфец, *Советская Россия...*, стр. 137-38, 141-42, 145; Агаян, *указ. соч.*, стр. 307; *ИН*, s. 902.

161) Шамсутдинов, *указ. соч.*, стр. 187. 英国はソヴェトではなくトルコとの講和を選択すべきだとした (*DBFP*, XII, Nos. 622, 631; Atamian, *op. cit.*, pp. 242-43).

162) ソヴェトの憤怒は次の指摘につくされている。「アルメニア・ブルジョアジーとダシナクツトエン党はひたすら権力を維持するためにだけ、アルメニアの半分をトルコに引き渡そうとしている。ロシアとの同盟がアルメニアの勤労人民を解放したに相違ないまさにその時に、彼らはトルコのパシャたちと妥協点を見出すことに期待をかけているのだ」(*«Правда»*, № 262, 1920. 11. 21, стр. 2)。

163) Агаян, *указ. соч.*, стр. 305-306; Ленин, *указ. соч.*, т. 42, стр. 560; см. Гулиев, *указ. соч.*, стр. 638.

164) 詳細は, см. Борьян, *указ. соч.*, стр. 122.

165) 協定全文については, Борьян, *указ. соч.*, стр. 122.

166) Бегиян, *указ. соч.*, стр. 208-209, 211; *ДВП*, III, № 217, 251.

トルコ＝アルメニア戦争とトルコの対ソ関係（1919-1920）

い。11月29日アルメニア革命委員会が発した『トルコにたいする布告』の一部は次のようにのべている。

「我々がその敵ダシナクを打倒し、ついで協商側掠奪者どもに対する闘いを告知する時、帝国主義のクビキから解放されつつある民衆のトルコが我々をトルコとならぶセーヴル条約の敵対者とみなして、まさに今や我々に友好的な手をさしのべるに違いないと確信する」。¹⁶⁷⁾

では、トルコはソヴェト＝アルメニアに対して「友好的な手」をさしのべたであろうか。答は否である。まさに革命委員会が過度に大きな期待を「民衆のトルコ」にかけたことが直ちに明らかとなるであろう。

VIII. トルコとソヴェト＝アルメニアとの対立

1920年12月にソヴェト権力がアルメニアに誕生してから翌21年3月にモスクワ条約が調印されるまで、つまりトルコ＝アルメニア戦争後の情勢におけるトルコとソヴェトとの関係には極めて錯綜したものがあつた。それは民族解放を指向するトルコが一方でアルメニア人に民族抑圧を加えるというトルコ革命の一政治過程とソヴェト側の民族問題の原則との鋭い対立となって現われた。¹⁶⁸⁾

ソヴェト＝ロシアの最初の苦境はすでに11月初旬ギュムリュをトルコ軍が占領した時に始まった。11月5日ダシナクがギュムリュ（アレクサンドローポリ）を撤退したのち市権力はアルメニア共産党アレクサンドローポリ委員会によって掌握され、翌6日アルツヴィクの名で知られるテル・グリゴリヤン（М. Тер-Григорян）を議長としてアレクサンドローポリ軍事革命委員会が形成された。7日16時トルコ軍第9カフカース師団第28連隊がアレクサンドローポリに入りトルコ軍代表（おそらく連隊長エミン Emin 少佐）が「革命的演説」をおこない、ソヴェト権力樹立についてトルコ軍とアレクサンドローポリ党委員会のあいだに交渉がおこなわれた結果、11月17日正式にソヴェト権力が確立された。同日カラベキルは祝賀の布告をなした。¹⁶⁹⁾ しかしながら、トルコ軍のソヴェト権力承認がトルコ側のアルメニアに対する要求を実現するための一手段にすぎなかったことがやがて明白になる。1921年1月になってアレクサンドローポリ革命委員会がエリヴァンに宛てた報告の一部はこの事態を次のように性格づけている。

「遺憾ながら、わが権力樹立のはじめからトルコ軍司令部は我々が勤労者権力ではなく占領トルコ軍司令部の意志と命令の従順な執行者である限りでのみ、わが権力を承認した

167) Борьян, указ. соч., стр. 151; также см. ДВП, III, № 193, стр. 348-49.

168) ソヴェトのおちいったジレンマは次のアルメニア人ボリシェヴィキの指摘に見てとれる。「トルコ人のアルメニア人に対する伝統的政策と歴史的に培われたトルコ人とアルメニア人の仇敵関係は、アルメニア人民大衆にとりたまたまなく痛苦な雰囲気をかもしだした。アルメニア人は救済を期待したがそれは期待だけに終わった。何故なら、東方諸国との接近（восточная ориентация）を基本としていた革命委員会とロシアの政策は、トルコ人は退去しないだろうと被占領地の住民に説明したからである。住民たちはいらいらした。そして反革命の煽動はまさにかっこうの基盤を見出した」（Борьян, указ. соч., стр. 136）。

169) Агаян, указ. соч., стр. 302-303; Хейфец, Советская дипломатия и народы Востока..., стр. 81-82; ТІН, III, s. 213.

がったにすぎないことを我々は確信するにいたった。トルコの統治との現実的接触のあととなつては、トルコの解放運動のあまねく知られる革命的スローガンによせる我々の信頼は変化した。すなわち最初は疑惑に、ついで完全なる幻滅へと。」¹⁷⁰⁾

そこで次にトルコの抑圧実態の一端を紹介しておかねばならない。革命委員会の調査によれば、1920年秋の占領期間だけでもアレクサンドロポリ市・郡あわせて6万人に及ぶアルメニア人が殺害・虐殺され、1万5千人以上の成年男子が14-15時間の強制労働のためにアナトリア中央部に送られたことが判明する。¹⁷¹⁾ トルコの圧迫の模様をあるグルジア人ポリシェヴィキがヴィヴィドに再現している。

「トルコ人はすべての電信設備を撤去し、アレクサンドロポリ市を全世界から隔離した。そして驚くべき計画つまりすべての人民の殺戮計画の実行に着手した。都市から村落にいたる道路は遮断され、反対に村落からのそれも閉鎖された。誰もが入れなかった。都市には食糧がなかった。結果はトルコ人にとって輝かしいものだった。極貧の住民や避難民が多数倒れて死亡した。」¹⁷²⁾

他方トルコ軍によるアルメニア財産の強奪・横領行為も存在した。トルコ軍はカルス、ギュムリュなどの電信電話設備・武器弾薬・農工業機械など「価値のあるものすべて」をサルカムジュ、エルズルムに運搬した。¹⁷³⁾ ところがトルコ側では、ケマルもカラベキルも以上の如き事態を全面的に否認している。彼らは虐殺・圧迫なるものがダシナクの宣伝であるとし、却ってアルメニアのトルコ人虐殺をここでも強調する。¹⁷⁴⁾ しかし規模・実態を誇張してはならないが、トルコ軍当局の加えた圧迫はまぎれもない事実である。例えばギュムリュにいた合衆国近東救済委員会要員が1921年1月4日になってアルツヴィク宛に「アメリカ人市民がアレクサンドロポリで強制的に拘禁される惧れがあり、捕虜や強制労働の辱めにあう危険が実際にあった」と抗議したことを考慮すれば、アルメニア人民衆

170) Агаян, указ. соч., стр. 303.

171) Саркисян, указ. соч., стр. 441-42; Агаян, указ. соч., стр. 304. また Бегиян, указ. соч., стр. 209 によれば殺傷者 121,000, 強制労働 10,000 名となっている。ひとまずサルキンヤン (стр. 441) に従って占領期のアルメニア人民衆がうけた被圧迫状態を整理すれば、次の如き表ができあがる。

	死 亡	負 傷	捕虜/拉致	餓 死
成 年 男 子	30,000	20,000	18,000	10,000
既 婚 女 性	15,000	10,000	2,000	5,000
未 婚 女 性	10,000	5,000	3,000	1,000
未 成 年 者	5,000	3,000	---	10,000
計	60,000	38,000	23,000	26,000

172) Саркисян, указ. соч., стр. 441; см. Агаян, указ. соч., стр. 322.

173) Саркисян, там же, стр. 440; Агаян, там же, стр. 291, 322, 323, 375; bak. ТІН, III, s. 249.

174) İN, s. 697-707, 897-98; Atatürk'ün Söylev ve Demeçleri, cilt: 3 (1918-1937), Ank., 1961, 2' inci Baskı, s. 17.

の場合をたやすく想像できるであろう。¹⁷⁵⁾

それではこのようなトルコのアルメニア人圧迫・虐殺は何を目的としたものであろうか。ひとつは明らかに、カルスーギュムリュに人為的なムスリム多数派状態をつくりだし、アルメニア人住民数を暴力的に減少させることを狙うものだった。これは国民誓約に規定された住民投票に備える事前措置だったといえよう。¹⁷⁶⁾ いまひとつは、ソヴェト化の後もなお対立状態にあったアルメニアとの軍事衝突を予想して後方の安全を確保するためのものであった。¹⁷⁷⁾ しかもこれらの論理が大戦中のオスマン権力のアルメニア人虐殺のそれと全く同一だったことに注目せねばならない。何故なら大戦中の虐殺も戦線後方のアルメニア人蜂起を危惧したオスマン当局がアルメニア人を大量に追放・移住させていく過程で生じたからである。

ソヴェト側の対応はどうであったか。トルコのアルメニア人圧迫はソヴェトにとり、「アルメニアがダシナク権力のもとにあったらちには自然でもあったが、ソヴェト権力が確立された今となつては正当化されえない」¹⁷⁸⁾ ものであったろう。ことにソヴェト＝アルメニアの抗議は次にあげる覚書によく表現されている。

「強制労働使役用の民衆の調達、小銃1万挺の引き渡し、誰をいつ何処で如何に殺害したかも判然とせず^{アスケル}に兵士殺傷の件で告発された民衆の引き渡しなどの諸要求とこのソヴェト機関¹⁷⁹⁾の機能とはいかなる共通点ももたない。かくて、アルメニア革命委員会はかかる機関のこれ以上の存続はソヴェト権力の理念によせる勤労大衆と国内人民の信用を失墜させるものでしかないことを承認せざるをえない」。

そしてこれらの事実がトルコの革命的課題の実現を妨げると覚書は結論づけた。¹⁸⁰⁾ トルコ側の対応は次のようなものだった。トルコによればギュムリュ条約は「抑圧」ではなく「公正」を具現している。それ故、その早期批准と条項実施が必要である。また武器引き渡しは「我々の年来の敵たる資本主義諸国」に対して用いるための要求である。条約規定条項の実施の遅れはギュムリュ撤退を延期させるだけにすぎない。¹⁸¹⁾

ここではカルス占領が既成事実化し言及すらされない。今や対立の現象的一要因はギュ

175) *FRUS, 1920, III, p. 929*; また *IH, s. 911* もみよ。この問題ではトルコに同情的だったローリンソン中佐も次のようにいう。「私たちが見たこれらのアルメニア人捕虜は労働者として（奴隷というのがふさわしい表現だが）使役されていた。飢餓や困窮を見慣れていた私でもそれは筆舌に尽しがたかった。これらの人々の姿は私が決してそれまで経験しなかった衝撃を私にあたえた。その想い出は生涯を通じて私に残るであろう」(Rawlinson, *op. cit.*, p. 238)。

176) モスクワ交渉で「アルメニア問題」が提起された時、バキル・サミは8月30日ケマルに次の如く提案していた。「混成委員会によるアルメニア国境もしくは他の諸問題の解決に大国民議会が同意するなら、ダイヤルバクル・ウルファ・マルジーンその他の適当な場所からある程度の遊牧民・定住民をたとえ一時的にせよヴァン・ビトリス両州に移住させ、委員会の活動期間中はこれらの地方のわが無人部落をいっぱいにして、予測されるアルメニア人の数よりもムスリム住民が圧倒的に多数派であることを示すのが不可欠である」(Cebesoy, *Moskova....*, s. 86; Tengirşenk, *a. g. e.*, s. 170)。

177) 1921年1月26日付参謀本部宛カラベキル, *TİH, III, s. 228-26*。

178) 1920年12月10日付トルコ政府宛ソヴェト＝アルメニア政府覚書, *ДВП, III, № 217, стр. 379*。

179) アレクサンドローポリ市革命委員会をさしている。

180) 1921年1月19日付トルコ政府宛ソヴェト＝アルメニア政府覚書, *ДВП, III, № 270, стр. 484-87*。

181) 1921年2月5日付ソヴェト＝アルメニア政府宛トルコ政府覚書, *ДВП, III, стр. 487-88*。

ムリュ条約の適法性の可否をめぐる見解の差異にあった。また、ギュムリュがトルコ軍占領下にあることはソヴェト＝ロシアにとっても許しがたいことなのであった。¹⁸²⁾ 何故なら、ギュムリュはバクーとチフリス、エリヴァンをつなぐ鉄道の唯一の結節点であり、この要衝の確保はカフカースの不安定な政治情勢を考えるとロシアにとり死活の問題だったからである。加うるにギュムリュは、19世紀いらいアルメニア革命運動の中心であり、1920年5月に早くも一時的にソヴェト権力が樹立されたこともある革命派の拠点であった。¹⁸³⁾ 大戦中1918年3月ポリシェヴィキ・アレクサンドローポリ委員会はトルコ軍の侵略に抗し赤衛隊を徴募した歴史をもっていた。そのアピールはいう、「決定的な時はきた！すべてを戦線に！すべてを武器にかえて！革命の敵に抗して容赦なき闘いに！」と。¹⁸⁴⁾

しかも1918年5月15日にギュムリュを降したオスマン＝トルコ軍とは、まさにキャジム・カラベキルの指揮する第1カフカース軍団なのであった。このような大戦いらいの歴史を背景としてソヴェト＝ロシアはトルコ＝アルメニア戦争後の新情勢のなかでふたたびトルコとの関係の調整をはかっていくことになる。

IX. 結 論

トルコ＝アルメニア戦争は「トルコ＝アルメニア」の分離に反対し三サンジャク統合を目標としたトルコ民族解放運動の必然的帰結であった。その発生の直接的契機が、アルメニアに対する共同軍事行動の推進を主要目的とした対ソ交渉の挫折にあったことも明らかである。ケマルがトルコ＝アルメニア戦争に反対しなかったことはいうまでもない。またカラベキルについていえば、トルコ分割を迫認するものでしかない西欧諸国との「単独講和」に否定的であり最も積極的なソヴェトとの同盟論者として登場したことが確認された。この場合、とくにカラベキルが対アルメニア攻撃をソヴェトの利益と整合するものとして考えた点が重要であろう。いいかえれば彼に代表されるようにトルコは領土問題を含むいわゆる「アルメニア問題」をソヴェト＝ロシアとの友好関係のなかでパワー・ポリテイクスの次元で処理しようとしたといえる。¹⁸⁵⁾ このことは「アルメニア問題」を少数民族問題として把握する発想が完全に欠如していたことを意味する。では、民族解放運動下のトルコによるアルメニア人抑圧はいかにして可能であったのか。この点を最後に整理しておこう。

アンカラ政府指導層の共通見解として、アルメニア人－ギリシャ人が「東方における資本の走狗」だという認識があった。というのは、伝統的にトルコ資本主義の商工業セクターを彼らが押えていたために、トルコ分割を狙う「ヨーロッパ資本主義者たちの侵略に加担している」とみなされたからである。ここから、「資本に反対する闘争は階級的性格を

182) См. ДВП, III, № 286, стр. 507-508.

183) См. А. Н., "Коммунизм в Армении," *Коммунистический Интернационал*, № 13, 1920/9/28, стр. 2546, 2548.

184) Лудшувейт, *указ. соч.*, стр. 172, 184.

185) カラベキルの次にあげる指摘をみよ、「いったいソヴェトは何故に我々の提案を受容しないのか。我々がアルメニアを、ソヴェトがグルジアをほしいままにできるのは結構ではないのか」(*ИН*, s. 812).

186) *ИН*, s. 793.

おびず、民族的性格をおびていた」という結論がだされるが、¹⁸⁶⁾ 重要なのはこの認識がオスマン帝国の少数民族支配秩序の基層をなしたミレット（Millet）制のなかでのアルメニア人に対するオスマン支配者層の見解を民族解放下のトルコも維持していたことを意味する点である。つまりアルメニア人をレヤヤー（reâyâ 従属民族）と見なす支配民族意識が強力だったのである。これまで見た論理は容易に「東方における資本の走狗」たるアルメニア人全体への抑圧を合理化するばかりでなくトルコ＝アルメニア戦争が反帝国主義的性格のものとして一方的に正当化される傾向にもつながる。¹⁸⁷⁾ 以上からして、大戦中の「アルメニア作戦」と民族解放を指向するトルコの対アルメニア戦争の歴史的連続性は明らかである。¹⁸⁸⁾ すなわち大戦中それぞれ第2軍、第1カフカース軍団司令官として東部作戦に従事しアルメニア人への圧迫と全く無関係でありえないケマル、カラベキルが指導したトルコ＝アルメニア戦争にみられるトルコの侵略的性格は否定できず、その排外主義的傾向を無視すべきではない。トルコの東方関係に関する限り、次にあげる指摘はまったく正しいといわねばならない。「ケマリストの運動はその運動に参加することを完全に決意した指導者を統一進歩派の旧来からの人物たちのなかに見い出した。エルズルム大会ついでスィヴァス大会においてケマリストの運動はまさに新生トルコがうけついだ極端な民族主義と民族的排外主義という自らの教義を確立した」。¹⁸⁹⁾

しかしながら大戦前のオスマン帝国と異なり戦後トルコの東方関係を複雑化した注目すべき要因があった。それは、国際帝国主義が「アルメニア国家」の建設をトルコ分割の触媒として駆使したことである。つまり、アルメニアによる「海から海までの大アルメニア」構想は連合国のトルコ分割案の利益と合致するものだった。従ってトルコからすればアルメニアの意図はギリシャのアナトリア深部への領土奪取を目的とする侵略と同じ意味をもった。何故ならアルメニアが「大アルメニア」理念に依拠したように、ギリシャが「メガリ・イデア」（大思想 *μεγάλη ιδέα*）¹⁹⁰⁾ に立脚して主張したアナトリアへの「イルレデンタ」はいずれも英仏を始めとする連合国に後援され、その分割案の中でのみ実現される性格のものだったからである。この意味でも、トルコ＝アルメニア戦争のギュムリュ交渉においてカラベキルがダシナク＝アルメニアに最初に要求した条件がセーヴル条約廃棄宣言だったことは深刻である。トルコにとり、対アルメニア戦争は政治的にもセーヴル条約撤廃を要求する自らの反帝国主義運動の不可分の構成と見なされた。トルコの東方関係においても分割を規定したセーヴル条約をアルメニアに否定・廃棄させたまさにその時、他方でギュムリュ条約はバトゥーム条約の再版であり極度に侵略的性格をもったとい

187) 何故なら、アルメニアは「英国の忠実な走狗であり、ジェニーキン軍・英軍将校が多数おり、ジェニーキン軍とかわるものでない」からだった（*İH*, s. 670）。

188) カラベキルはのべている。「サルサムシュ・カルス・ギュムリュの何処をどのように攻撃すればよいかを私は経験にもとづいてよく知っていた」（*İH*, s. 858）。また、ケマルも、バクー攻撃・ザカフカース侵略を大戦中担った第9軍司令官に1918年6月就任する可能性があった（см. Лудшувейт, указ. соч., стр. 215/прим. 1）。

189) H. Pasdermadjian, *Histoire de l'Arménie: depuis les Origines jusqu'an traité de Lausanne*, Paris, 1949, p. 474.

190) 「メガリ・イデア」については、S. G. Xydis, "Modern Greek Nationalism," in *Nationalism in Eastern Europe*, Seattle/London, 1969; id., "Medieval Origins of Modern Greek Nationalism," *Balkan Studies*, v. 9/No. 1, 1968, Thessaloniki.

わねばならない。このとき、さながらヤヌスの双頭のようにトルコの民族解放的理念と排外主義的傾向は最もギリギリに極限化されて露出したのであった。¹⁹¹⁾ とはいえ、トルコの対アルメニア戦争における「勝利」は連合国にセーヴル条約完全実施を断念させ、その修正・再検討を余儀なくさせたという点でトルコが民族解放をかちとる突破口となったのである。¹⁹²⁾ アルメニア人の自己解放がいわゆる19世紀いらいの「アルメニア問題」という形でうちだされる限り、それは西欧諸国つまり国際帝国主義の支援なしには実現されえなかった所に大戦後のアルメニア人の悲劇の根拠があった。アルメニア人の自己解放は客観的にも主体的にもソヴェト化する以外に可能性はなかったのである。

最後に以上みたトルコ＝アルメニア戦争の性格をトルコの対ソ関係とのつながりで総括しておこう。トルコはレーニンが『帝国主義論』のなかで指摘したようにイラン、中国とならぶ「半植民地」であると同時に、他方かつてのレジャーだった隣接諸民族（アルメニア、アラブ、クルト）からすればアルメニア人圧迫に象徴されるように依然として「大国」と見なされるべき二重構造におかれていた。二重構造の前者を前提とすればトルコは国際帝国主義に対抗する被抑圧＝圧迫民族であり、後者からすればかつての「オスマン帝国主義」に極大化されるように抑圧－圧迫をまさに加える主体であった。1919-1920年の東方関係においてトルコはこの矛盾する二側面を使い分けた。つまり対ソ関係においては前者が強調され、アルメニアに対しては後者の側面がうちだされた。この二重構造の矛盾を最もドラスチックに露呈させたのがトルコ＝アルメニア戦争だったことはいうまでもない。が、少なくともトルコが一方で国際帝国主義に対抗する限り、ソヴェト＝ロシアはそれを支援せざるをえない。トルコ＝アルメニア戦争の結果ソヴェトは深刻なディレンマにおちいったと思われる。何故なら、戦争後もたらされた連合国のトルコへの譲歩の方向は、トルコを反ソ戦線においやることなくトルコの三サンジャク＝カルス占領という既成事実に対処するののかというアポリアをソヴェトにつきつけたからである。それは、1920年夏交渉で国民誓約を根拠にブレスト＝リトフスク国境を主張したトルコに対して「原則」で一応拒否したソヴェトが否応なく「現実」のまえに屈服していく端緒となったのである。

(本稿は1973年7月10日スラヴ研究施設研究員会議で報告した内容を文章化したものである。)

〔後記〕 註〔2〕に、永田雄三、「トルコにおける前資本主義社会と『近代化』」、『後進資本主義の展開過程』、東京、1973、を追加しておきたい。これは部分的ではあるが、「アルメニア問題」をトルコの「近代化」との関連で扱った注目すべき論稿である。

191) 統一進歩派のパン・トルコ主義と戦後トルコの運動とのイデオロギー面での連続・不連続性がこの点で問題となるが、これは別途に検討せねばならない。ケマル自身「イデオロギー」としてのパン・トルコ＝チュラン主義は否定しているが (*FRUS, 1919, II, p. 883*)、このことと歴史的現実のなかでの彼の対応との矛盾は本稿でも明らかとなった。ソ連邦の研究者もケマルが「排外主義的侵略性」をもっていなかったとするが、これも現実過程のなかでの検証を必要とするだろう。D. E. Еремеев, “Кемализм и Пантюркизм,” *Народы Азии и Африки*, 1963, № 3, стр. 58 и сл.; A. Ф. Миллер, “Формирование политических взглядов Кемала Ататюрка,” *Народы Азии и Африки*, 1963, № 5, стр. 65-66.

192) 連合国の変化については統稿で検討するが、さしあたり、*DBFP, XIII, Nos. 181, 186*; The House of Commons, *Parliamentary Debates*, v. 136, London, 1920, cols. 697, 1893-1906.

The Turco-Armenian War and Turkey's Relations with Soviet Russia (1919-1910)

Masayuki YAMAUCHI

After the defeat of Turkey in World War I, under the leadership of Mustafa Kemal and Kâzım Karabekir, the National Independence War broke out in Eastern Anatolia when Turkey faced the danger of being attacked by Armenia. The Armenian movement was the deadliest of all dangers and threats for the Turks living in Eastern Anatolia because Armenia in the hand of the *Dashnaktstion* (Federation) Party wanted eagerly to set up the so-called "Great Armenia" by annexing the very heartland of Turkey, namely, six provinces of Eastern Anatolia (which was called "*Turkish Armenia*" by the Armenians) and Trabzon. With the help of the British Army, Armenia had already occupied the Kars district comprised of three sanjaks (*Elviye-i Selâse*). Undoubtedly this was a humiliating action for Turkey, because Kemal and his cadres insisted stubbornly on their right to possess three sanjaks on the ground of the Brest Litovsk Treaty (3 March 1918), Kemal's conviction was firmly embodied by the declaration of the Erzurum Congress which later came to be known as the National Pact (*Misak-ı Milli*). Therefore the writer of this paper considers that the main purpose of the Turkish National Liberation Movement was to recapture three sanjaks.

Although little known until now, the real aim of Kemal's first diplomatic act shortly after the establishment of the Grand National Assembly in Ankara, in April, 1920, was a dispatch of his agents to Russia with the note for an official proposal by which he wished to carry out the military operation in collaboration with the Red Army against Dashnak Armenia to occupy Kars. Therefore the core problem for a student of the Turkish relations with Russia and Armenia during the National Independence War, would be the question: To what extent did the so-called Eastern Policy ("*Şark Siyaseti*"), which involve even aggressive action against Armenia, have connection with the Turkish pro-Bolshevik orientation? Then the writer refers to Moscow negotiations to make this problem clear.

The first official negotiations between Turkey and Soviet Russia opened in August 1920. But the Soviet Government represented diplomatically by G. Chicherin demanded that Turkey must hand over the Van and Bitlis districts to Dashnak Armenia in order to solve "the Armenian Question" with advantage. Consequently the Ankara Government decided to undertake its planned military attack against Armenia. To push the Armenians back this operation had been planned before, but at Russian request had been postponed. Thus the Turco-Armenian War would break out on September 23, 1920. After the victorious operation in which Turkey annexed the half segment of Armenia, the political relations between Turkey and the Soviets were strained along with the military arena. Because the Sovietization of Armenia had come as the

result of a conflict between Turkey and Dashnak Armenia, then it would all the more necessary for Ankara Government to solve the disputed issues in order to avoid the possibility of clashes with the Soviets.

In conclusion the writer of this paper makes an attempt to clarify the fact that the Turco-Armenian War was inevitable for Turkey if it insisted on the repossession of three sanjaks. Likewise it seems to the writer that the initiative of the War was actively taken from the Turkish side owing to the deadlock of diplomatic negotiations with Soviet Russia as a result of disagreement over the Armenian question.

Up to the present time the above events have sufficiently been clarified neither by the Russian nor by the Turkish historians. Professor Gotthard Jäschke has written several articles concerning the Turco-Soviet relations. Dr. A. N. Kheifets has published some works which, though only partially dealing with the above questions, are still useful for their references to unpublished Soviet materials. These works have considerably succeeded in illuminating the historical background of the political relations between Turkey and Soviet Russia. The fact, however, remains that even these scholars have not completely solved the academic issues concerning the character of the Turco-Armenian War. In the writer's opinion, no attempt has ever been made to study the decision making process by Kemal and Karabekir in the theater of their "Şark Siyaseti." Therefore the writer has made his main references in this study to describe in detail the political and military moves of Turkey towards Armenia connected with the Turco-Soviet relations on the basis of the newly published documents and memoirs. Among them those of Kâzım Karabekir are filled with interesting documents markedly different from other books. The table of contents in the present paper is as follows.

- I. Introduction
- II. The Turkish Relations with the "East" after World War I
- III. The Turkish National Liberation Movement and Armenia
- IV. The Decision Making of "the Eastern Policy"
- V. The Turco-Soviet Negotiations in Moscow (August, 1920)
- VI. The Process and Political Character of the Turco-Armenian War
- VII. The Turco-Armenian War and Soviet Russia
- VIII. The Turco-Soviet Armenian Tensions after the War
- IX. Conclusion

Türk İstiklâl Harbinde Türk-Ermeni Savaşı ve Türkiye'nin Sovyet Rusya ile İlişkileri (1919-1920)

YAMA'UÇI Masayuki

Bu incelemenin amacı, Türk İstiklâl Harbi devrinde Türk-Sovyet ilişkilerindeki gelişmelere paralel olarak, Eylül 1920'de başlayan Türk-Ermeni Savaşı'nın siyasî bir

hususiyeti ve mânasına bakmaktan ibarettir. Bugünkü Türkiye’de resmî bir noktai nazara göre, Türk-Ermeni Savaşı, “Doğu Harekâtı” adıyla Türk Ulus Kurtuluş Savaşı’nın mühim elemanlarından biri olarak fevkalâde ehemmiyet verilmektedir. Meselâ, Kemal Atatürk söyledi: “Türk ülkelerini kendisine bağışlamayı tasarladıkları Ermenistan, Osmanlı Devletinin 1877 savaşında yitirmiş olduğu yerleri bize, Ulusal Hükûmete bırakarak aradan çekilmiştir...”. Bu itibara karşı şimdiki Sovyet Birliği’nde bir çok talebeler, bu savaşın Kemalçılar arasında bulunan “dinî ve feodal mürteciler” tarafından tahrik edildiğini ısrar etmek istiyorlar. O talebelerin izahına göre, Doğu Harekâtının yöneticisi olarak “Doğu Fatihî” diye anılan Kâzım Karabekir “belli bir şovnist ve mürteci” dir. Öyleyse neden Karabekir Sovyet Rusya ile dostluk ilişkilerini tesbit etmeğe çalışıyormuştu? Rus talebelerinden açık cevabı beklemek mümkün değildir. Çünkü onlar son zamanlarda Türkiye’de neşrettilen kitapları ve belgeleri bile okumaya çalışmıyorlardı. Bu incelememde Türk İnkılâpı tarihinde tamamen tanınmayan Ankara Ulusal Hükûmeti’nin “Şark Siyaseti” (Doğu Politikası)’nin hususiyetini Sovyet Rusya ile Türkiye’nin ilişkilerini nazarı itibara alarak izlemeye çalışıyorum. İçindekiler şudur ki:

- I. Giriş
- II. Birinci Dünya Harbi sonrakinde Türkiye’nin “Şark Münasebeti”
- III. Türk Ulus Kurtuluş Savaşı ve Ermenistan
- IV. “Şark Siyaseti”ni idare ettiği iki zat: Mustafa Kemal ve Kâzım Karabekir
- V. Ağustos 1920’de Moskova Müzakeresi
- VI. Türk-Ermeni Savaşı’nın ilerlemesi ve siyasî bir hususiyeti
- VII. Türk-Ermeni Savaşı ve Sovyet Rusya
- VIII. Türkiye ile Sovyet Ermenistan arasındaki Düşmanlık
- IX. Netice

İlinci ve IIIüncü Bölümde Birinci Dünya Harbin sonunda 30 Ekim 1918 tarihli Mondros Mütarekesi ile başlayan yeni siyasî ve askerî şartlar altında Türk-Ermeni ilişkileri hakkında kısaca bilgi vermeye çalışıyorum. Mondros Mütarekesi gereğince Türk Ordusu’nun Kafkasya’yı boşalttığı zaman Kafkasya’da Ermeni Cumhuriyeti bulunmakta idi. Türk Ordusu’nun 1914 sınırlarına çekildiği zaman “Elviye-i Selâse” (Üç Liva) denilen Kars-Batum-Ardahan bölgesinde Müsülmanlar ve Türkler “Cenubi Garbî Kafkas Hükûmet-i Muvakkata-i Milliyesi”ni kurdular. Merkezi Kars’ta bulunan bu Hükûmetin siyasî bir gayesi Brest Litovsk Muahdesisiyle Türkiye’ye geri alındığı Elviye-i Selâse’ni Türkiye için muhafaza etmekte idi. İngilizlerin himayesi altında bulunan Daşnak Ermenistan ise İngiltere’den yardımlarıyla 1919 Nisan’da Kars bölgesini elde etti. “Türkiye Ermenistanı” diye anılan Altı Doğu Anadolu İli ile Trabzon ve Elviye-i Selâse’nun bir kısmı olan Kars’ı birleşerek “Büyük Ermenistan”ı kurmaya tasarlayan Erivan Daşnak Hükûmeti karşısında Doğu Anadolu’da kurtuluş savaşları meydana çıktı. 1919 Haziran Erzurum Millî Kongresinde ana dâva iki nokta ile ifade edilir. 1° Bir Ermenistan saldırısı karşısında son kişinin ölümüne kadar savaşmak. 2° Osmanlı câmiası’ndan ayrılmamak için her fedakârlığı göze almak. Esasları Erzurum ve Sivas kongrelerinde tesbit olunan “Misak-ı Millî” (Ocak

1920) dahi Elviye-i Selâse'nin Türkiye'ye aid bölgeler olduğunu katî surette ilân etti. Demek ki Türk Ulus Kurtuluş Savaşı'nın maksadlarından biri Elviye-i Selâse yani Kars İli'ni geri almaktadır.

IVüncü ve Vinci Bölümde Şark Siyaseti'ni idare ettiği iki zat, Mustafa Kemal ile Kâım Karabekir'in Doğu Harekâtı hakkında ne fikirleri taşıdıklarını tahlil etmek çalışıyorum. Kâım Karabekir, Mustafa Kemal'tan Elviye-i Selâse bölgesini işgal etmek için yapılacağı Doğu Harekâtı'na müsaade istemişti. Fakat Mustafa Kemal Bolşeviklerle siyasî ilişkilerini tesbit etmeden askerî harekâta girişmenin faydasız olacağı fikrinde idi. Bu mevzuu bahis değildir ki Mustafa Kemal esasen hiç bir zaman Doğu Harekâtı aleyhte olmamıştı. Şöyleki Nisan 1920'de kurulan T.B.M.M. Hükümeti ilk iş olarak Sovyet Rusya ile siyasî ve askerî bir ittifak sağlamaya çalışmıştır. Yani 26 Nisan 1920'de Mustafa Kemal'in Sovyetlere hitaben yazdığı mektub, Emperyalistlerin esareti altındaki insanları kurtarmak için Sovyetler'le işbirliği yapmayı ve Türkiye'nin "emperyalist" Ermeni hükümeti'ne karşı harekete geçmeye bildirmektedir. Sovyet Dışişleri Komiseri Çiçerin ise bu Kemal'in ittifak teklifini 3 Haziran tarihli cevapta nezaketle atlamıştır. Bilâkis, Çiçerin "Türkiye Ermenistanı" nda bile referanduma taraftar olduğunu belirtiyordu. Bu mektub üzerine taarruz geri bırakılmış ve Sovyet'in aracılık teklifi kabul edilerek Türkiye için bekleme durumuna geçilmişti. Ama 1920 Ağustos Moskova'da başlanan Sovyetler'le Türk delegeler arasındaki müzakeresinde Çiçerin, Türkiye'nin Doğu İllerinden Van ile Bitlis'in Ermenilere verileceğini ciddî olarak istedi. Çiçerin'in bu şekildeki iddiası Ermeniler'i tutan Batı Sosyalistlerini tatmin etmek ve Lehistan Harekâtı'yla meşgul olmak bakımından ileri sürülmüştür. Ne olursa olsun, Ankara'da Sovyetler'in politikaları hakkında şüphe uyanmasına yol açtı. Binaenaleyh Mustafa Kemal, Ermenistan işini Sovyetler'e bağlı olmayarak biran önce bitirmek kararına vardı. Demek ki Mustafa Kemal o zamana kadar, Doğu Cephesi'nin mevcut kuvvetleriyle Ermenistana karşı taarruz başlamıyacak ve Sovyetler'in direkt veya endirekt askerî harekât yardımlarına ihtiyaç olacak kanaati beslediği halde, şimdi Sovyetler'in yardımına lüzüm görmeden taarruza karar vermişti. Bu suretle 28 Eylül 1920 sabah Türk-Ermeni savaşı başlamıştı.

VI'inci, VII'inci ve VIII'inci Bölümde Türk-Ermeni Savaşı'nın ilerlemesi ve siyasî hususiyeti'ni tahlil etmek istiyorum. Türk Ordusu 29 Eylül'de Sarıkamış, 30 Ekim'de Kars, 7 Kasım'da Gümrü'nü kolayca zaptetti. 2/3 Aralık 1920 gece yarısında Ermeniler ile Gümrü (Alexandropol) Andlaşması imzalandı. Bu andlaşma 1878 Berlin Kongresiyle Türkiye'den ayrılan Elviye-i Selâse'nun bir kısmı Kars İli'ni Türkiye'ye katmıştır. Netice olarak, Türkiye'nin Birinci Dünya Harbindeki yenilgisinden sonra Doğu Anadolu yani "Türkiye Ermenistanı" nda kurulmasına çalışılan "Büyük Ermenistan" bir hâyal olmuştu. İtilâf Devletlerin Türkiye hakkındaki ayırma plânlarının bir safhası böylece akım kalmıştı. Bu sebepten Türk-Ermeni Savaşı, Türk Ulus Kurtuluş Savaşı'nın ilk siyasî ve askerî zaferi olarak tahmin edebilir. Bununla beraber bu zaferden sonra Türkiye ile Sovyetler arasındaki yeni düşmanlık hasıl olmuştur. Çünkü Gümrü Andlaşma'nın imzalanması üzerine Sovyet Ermeni Hükümeti Erivan'da kurulmuştu.